

ル 4  
3605  
3



三 縁山増上寺

廣度院と號關東淨家の總本寺  
冠首して盛大の佛域より百一代 後小松院の御願に

開山大蓮社西譽上人中興者普光觀智國師なり

檀林ハ武德常野宮に存在を阿彌陀佛六八本願の中第十八を

以て最勝とまゝ小因と 御當家 御稱号 平氏の松や親殿を親歴し

能雪霜はあつたれを又君子の振ありと 太夫の封を受く其守や

木公は後八細いわのときハ十八公なり 依る是と弥陀の十八願は

多ひ精舎十八區を建てる永く檀檀林と 多く英才を育し 法運無窮の株を

盛慮徒ハ源家の所代と浄家の白旗流義より 松樹櫻葉茂きまぐれとの

本堂本尊阿彌陀如来 惠心僧都の作中座像 長四尺

額 三縁山廓山上人真蹟 上人ハ當寺第十三世なり 甲州の産なり

御經藏 本堂の前左の方辨の中あり 或人云らば納る所の一代藏經を

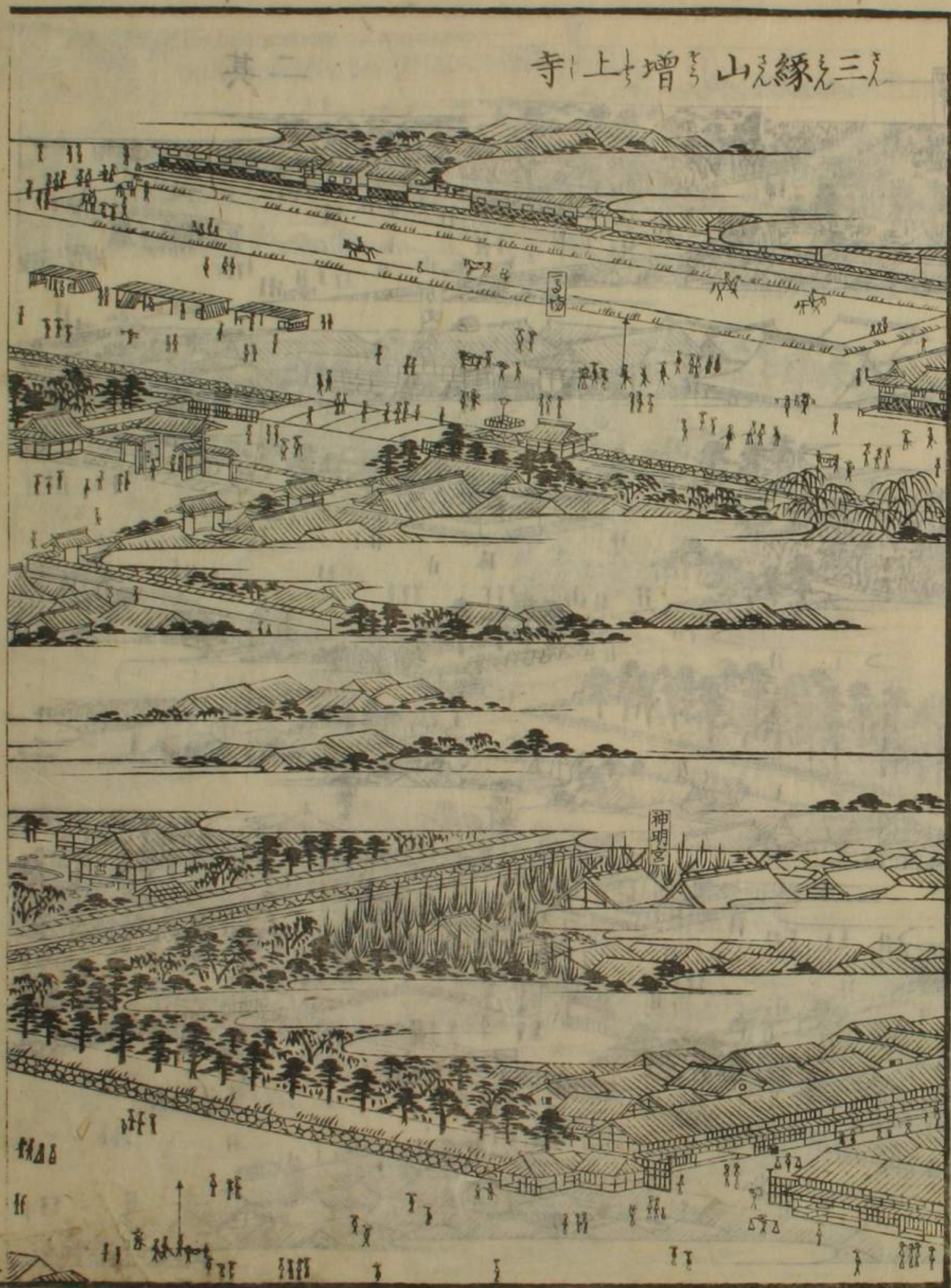
後彦坂九兵衛尉 台余を奉り 當山よりついでとなり 菊岡 祐宗云昔ハ方丈ハ

官造と列せ 寛永九年照譽上人了學大和尚 住持と創立し 今ハ

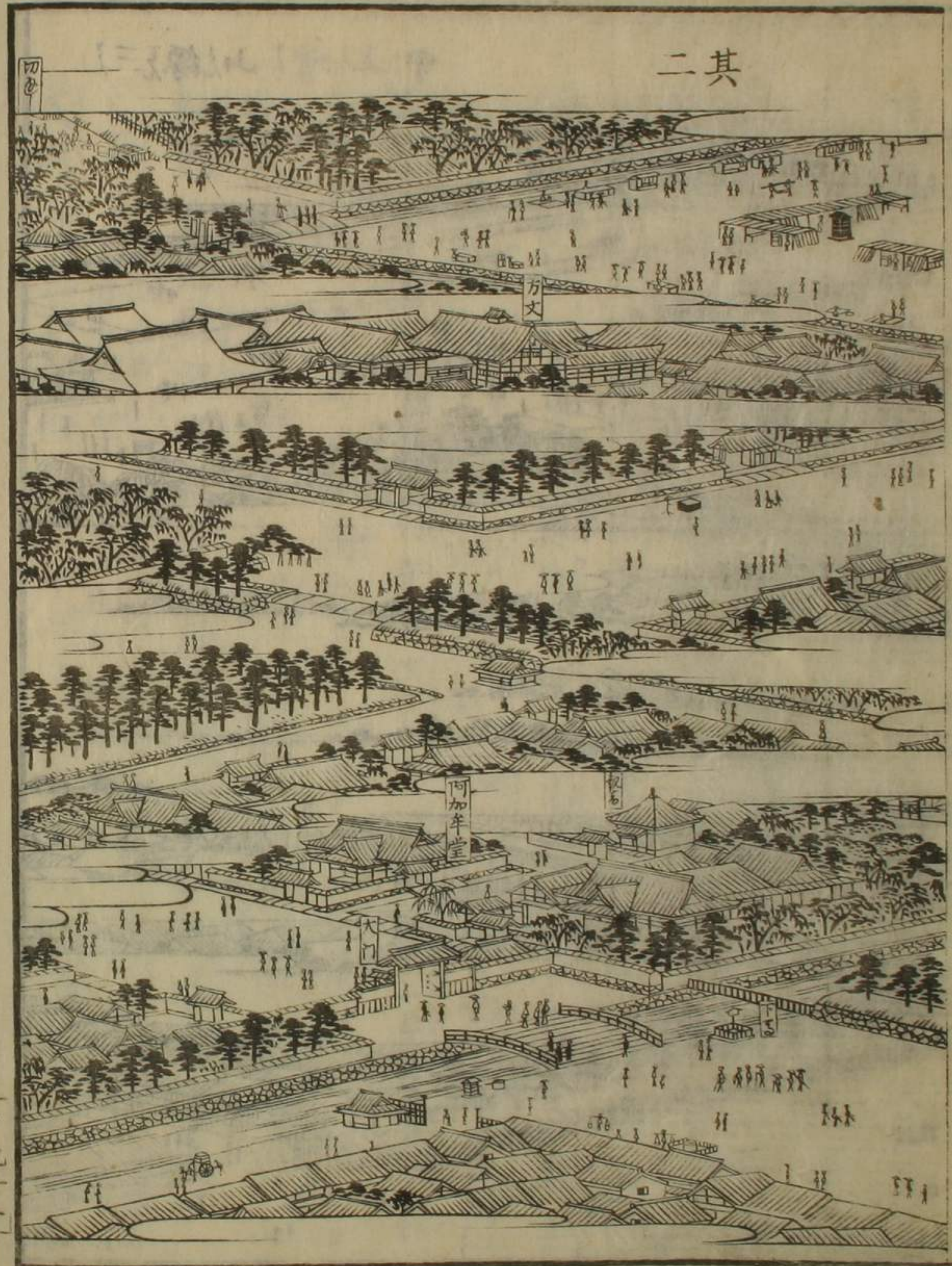
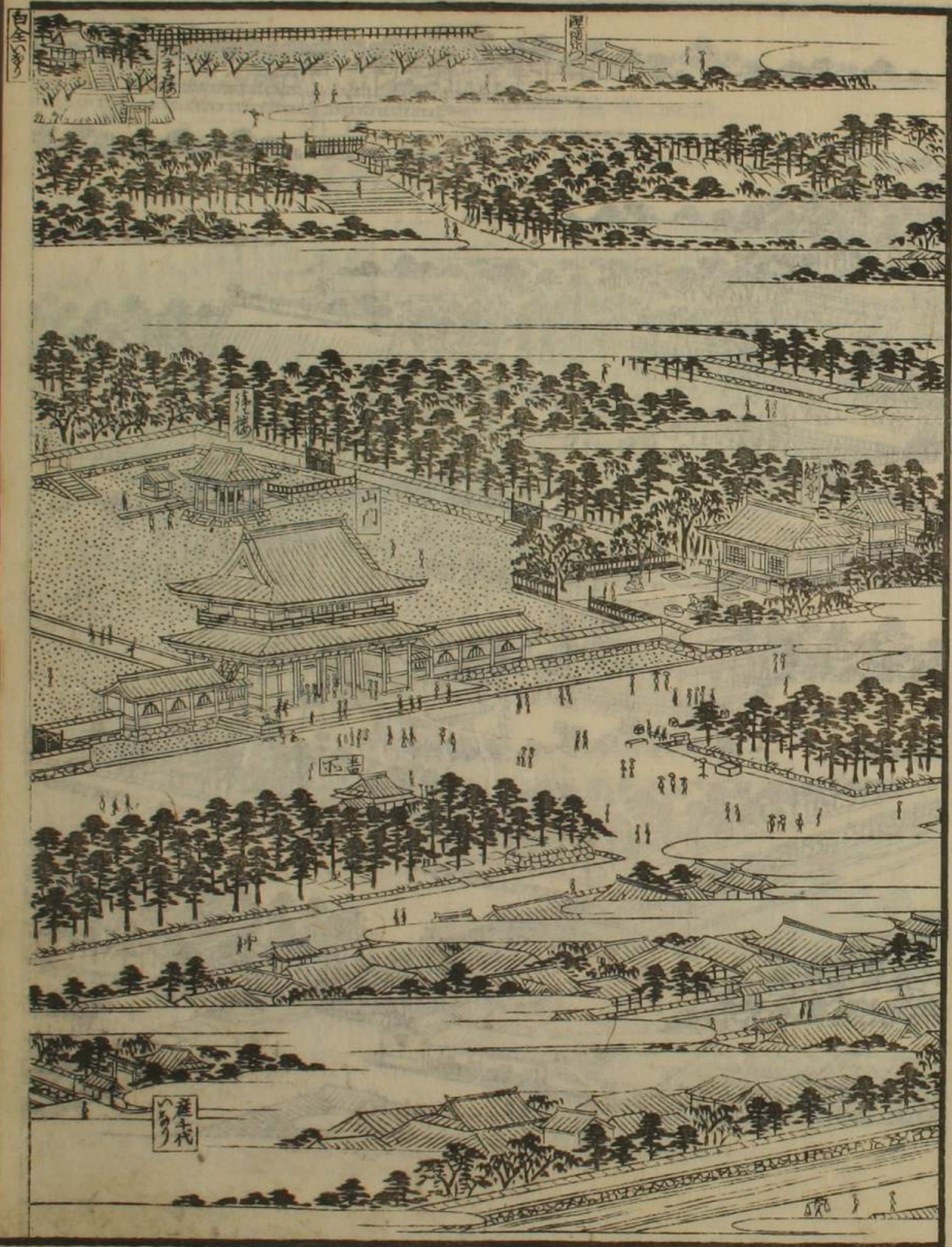
開山堂 同所左よりなり 當寺開山以下累世大僧の

昭和九年四月五日  
三上藤吉

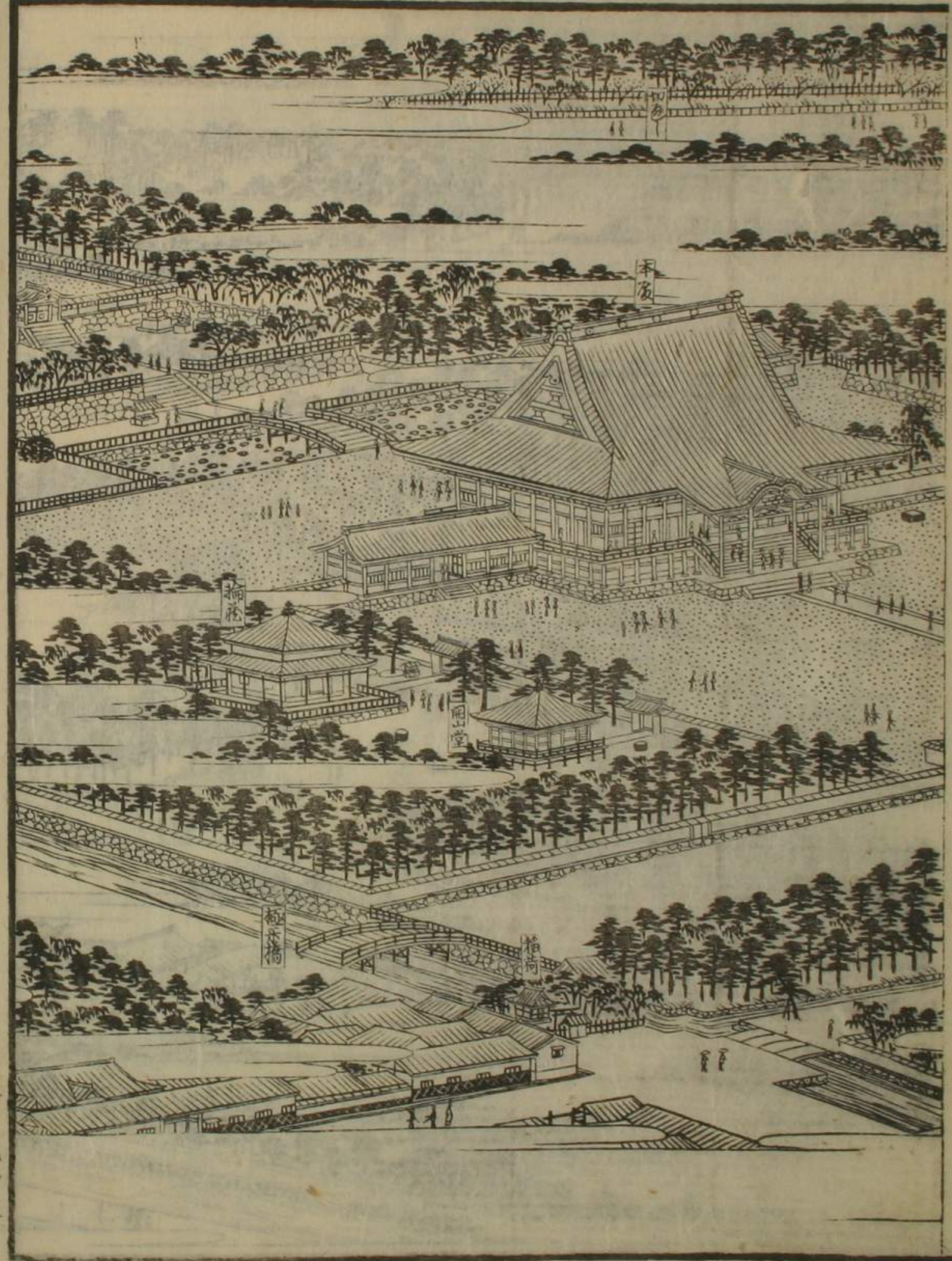
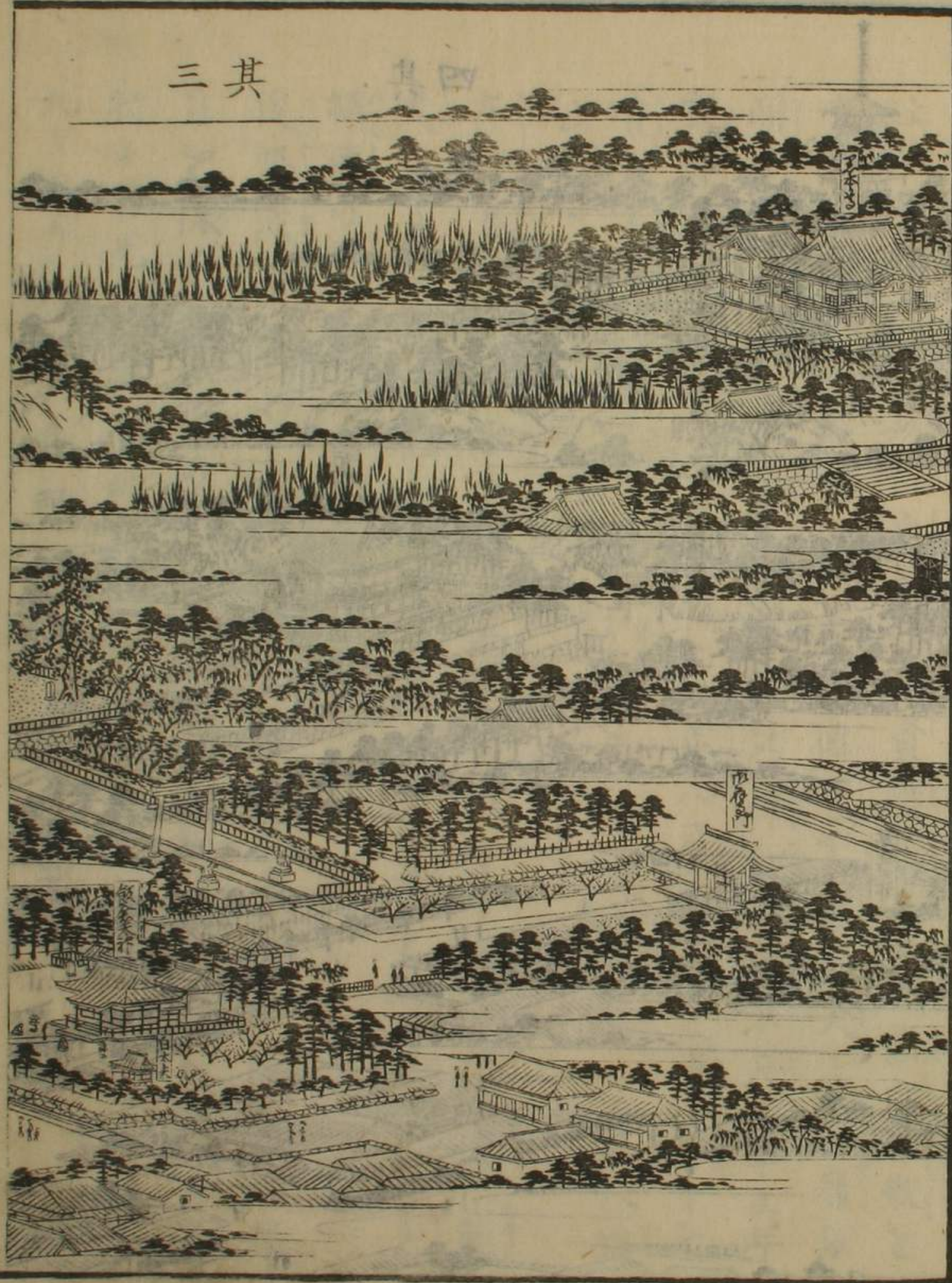
三縁山増上寺



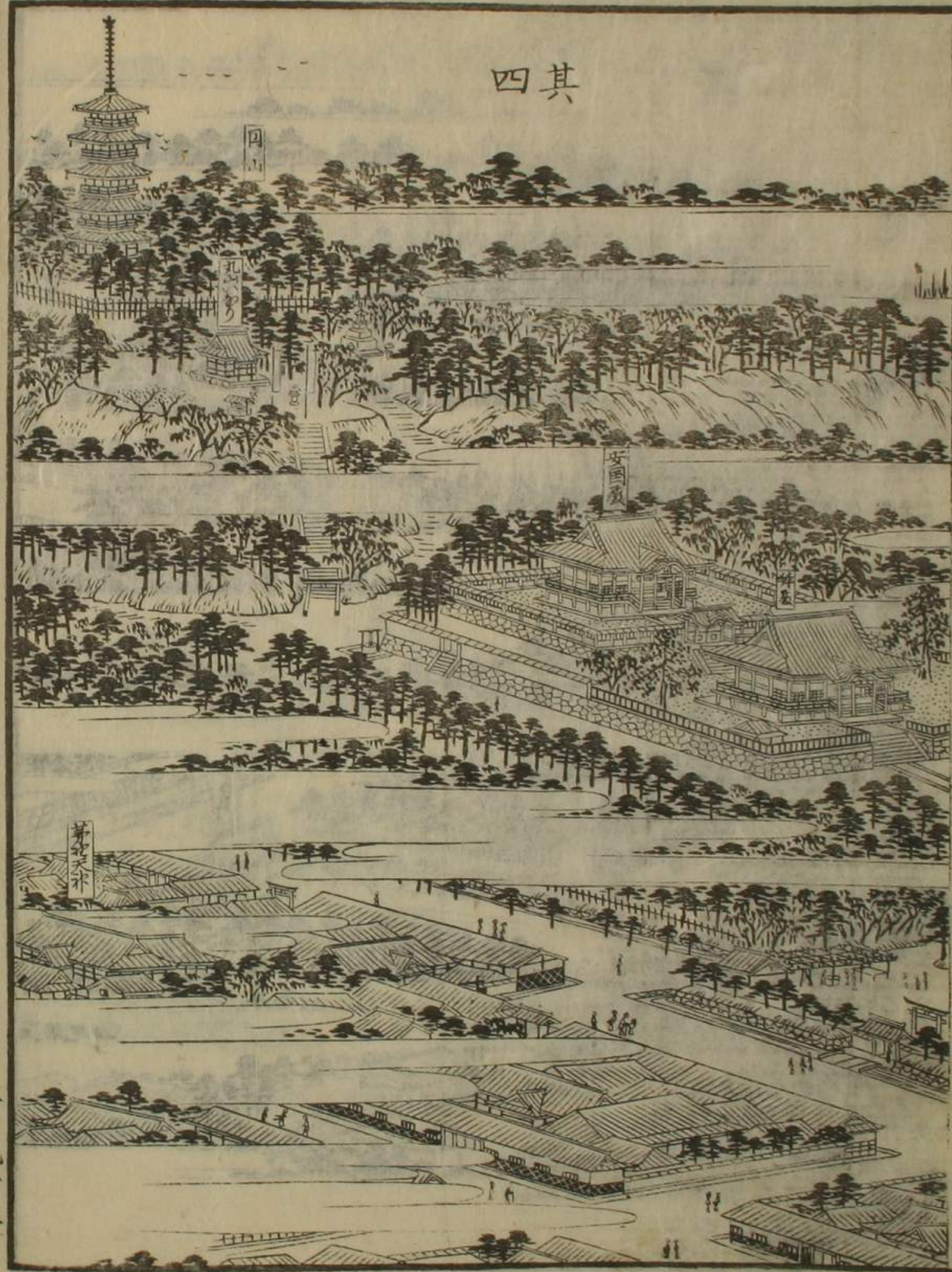
開山西管上人諱ハ聖聰大蓮社と号ハ 鎮西山統弟 貞治五年  
 七月十日 千葉弘圖貞治二年 北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守  
 氏胤母ハ新田氏あり童名を徳壽丸と云 十代あり 加冠して  
 胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳中々遂ニ同國  
 千葉寺に入り落飾し初々密教を學ひ後同公に投歸して淨  
 宗に入り智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に  
 住せし 今之増上寺是なり江戸名勝志云増上寺の 此寺始ハ真言瑜伽の  
 道場なり一々竟ハ光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗  
 風を轉し淨業の精舎とす 永享十二年庚申七月十八日  
 寂ハ歳七十五臘六十七 東國高僧傳ハ應永二十四年 中興開山  
 勅賜普光觀智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源管上人  
 と号す 平山左衛門尉李重の後裔なり傳燈 天文十三年 護國篇  
 武州由木に生る始衣を片山の宝臺寺に樞ひ十八歳感管



三其



其四



上人の帰し登壇受戒を天資聰悟の顯密の教を  
 究む上人没後上叢に到る長傳寺を創し大に法席を  
 開く人呼て教海の義龍蓮苑に祥鳳といふ天正十三年  
 雲譽上人の會下より同十七年八月塵書を傳兼して  
 増上寺第十二世となる當寺第十二世より同十八年天下安靖なるに連  
 んて大よ  
 大神君の眷顧を多し屢宮中へ請せしむ法要を聴  
 受し多し崇信他は異なり竟に増上寺と修宮せしむ  
 植福の地と稱しあり又  
 後陽成帝師を宮内へ徵し道と問ふ盛に淨教に深  
 旨を陳せ獻感ありく褒章を加へ新に宸翰を深し  
 特に普光觀智國師の號を賜ふ時は慶長十五年七月十  
 九日なり元和六年師微恙を承ふ嗣君



大將軍親ら臨して忝くも疾と問せる十一月二日諸徒よ遺誠  
辭世の偈を書し曰く佛話提撕心頭塵未後一句但  
稱佛と筆を抛く端座合掌一佛号と唱へく化も世壽七十  
有七僧臘六十 護國篇世壽八十あり 門葉姓くくく学  
徒流も浴を撰述もる 不論義決擇集阿弥陀經直譯  
等大おせよ 傳燈系圖等より出づ  
大銅鐘 本堂の右の方より鐘の厚さ尺余口の渡り五尺八寸そのり  
森登上人 歷天大和尚 延宝元年十一月十四日神谷長五郎平直重須田  
次郎太郎源 祇寔 鑄工 推名 伊豫吉寛云く其聲洪大 中く遠く百里に  
聞あ 撞の間の響尤長く 初人一里を歴るとく 滂よ一里鐘と稱を  
隔つ又安房上総へも 聞ゆるあり  
熊野三所權現祠 同所あり 則當寺の鎮守  
黒本尊堂 本堂の後蓮池より興のたまりあり 阿弥陀如来の像ハ惠心  
體より向ふく 世に呼んで黒本尊と稱せり 多くの星霜と歴く金泥を  
ましく変へて黒色となるは此稱ありとも 或ハ源九郎義経まかせる不

安國殿 本堂構の外南の方より四月十七日八所祭礼あり 参拜と許さる 諸君  
五層塔 同所佛殿の地倉林の中より 涅槃石 同所あり 佛彫物師  
又ハ羅漢石 曼荼羅石 同所あり 後藤祐乘得來の 鷹門 同所あり  
樂橋 同所前の溝に架せり  
宗廟 當寺院中より 御代の御靈屋なり  
御常念佛堂 涅槃門のちあり 惠照律院と号せ 浄土律中 當山の  
茶下は詳あり 當院より上人真筆の涅槃像の印板あり 有信の筆に授与  
他の圖は異なり  
性壽庵 方丈の後のたまりあり 尾州清須城主松平薩摩守忠吉の靈牌を  
置故は俗に薩摩堂とよむ 側は小笠原監物を始とく 殉死

安國殿 本堂構の外南の方より四月十七日八所祭礼あり 参拜と許さる 諸君  
五層塔 同所佛殿の地倉林の中より 涅槃石 同所あり 佛彫物師  
又ハ羅漢石 曼荼羅石 同所あり 後藤祐乘得來の 鷹門 同所あり  
樂橋 同所前の溝に架せり  
宗廟 當寺院中より 御代の御靈屋なり  
御常念佛堂 涅槃門のちあり 惠照律院と号せ 浄土律中 當山の  
茶下は詳あり 當院より上人真筆の涅槃像の印板あり 有信の筆に授与  
他の圖は異なり  
性壽庵 方丈の後のたまりあり 尾州清須城主松平薩摩守忠吉の靈牌を  
置故は俗に薩摩堂とよむ 側は小笠原監物を始とく 殉死



五人の石塔あり、柳の井といつて同所  
朝の坂通りあり、名泉なり  
飯倉天満宮 天神谷あり、當山の地主神なり、昔飯倉の神明も此地あり  
別當を 茅野天満宮 同所、南の方松林院あり、二月の瀬一時の莊觀あり  
舊跡 山下谷明定院あり、是も當山の別院なり、明定院前大僧正定月  
圓座松 同所、圓山同所、辨財天祠、赤羽門の内蓮池の中島あり  
右大将頼朝御遷座の法花堂安置あり、星霜を経て後、觀智國師感  
得あり、當寺宝庫に納めあり、貞享二年生答、豐玄上人此所一宇と  
建、一山の持守とあり、是も宝珠院別當あり、中島と芙蓉洲と号く  
此所門より外、赤羽の中島あり、品川への街道なり  
子聖權現社 清林院別當あり、産千代稻荷 觀智院あり、昔ハ普光院  
明誓壇通上人の 阿加牟堂 東の大門の通り常照院あり  
大門 東に、下野札と建、御成門 北の方馬場は相對す、此所  
涅槃門 通の上あり、惠照院あり、柵門 山下谷、赤羽門といふ  
當寺旧古と貝塚の地あり、光明寺と辨せし、真言  
瑜伽の密場なり、後小松院の淨願に依る草創ありし

古刹 なり、至徳二年酉、菅上人移り住する、後竟了了菅  
上人 傳通院三月の徳化に歸し寺を改め、三縁山増上寺と  
號し、宗風を轉し、淨刹といふ、事跡合考は、三縁山歴代系  
今、糶町邊中項移り、此谷邊後慶長初、移り、芝云、日比谷より芝へ  
移り、ハ慶長三年戊戌八月、武徳編年集成、慶長三年戊戌、去る  
天正十八年辛卯、平川口へ移り、増上寺を芝の地より、平川口  
比谷古へ地と接し、混し、平川口

東照大神君 天正十八年始、江戸の大城に入らせり、九州民  
鼓腹し、老幼相携り、道路を拜迎し、奉る幸、寺門の前路を  
通所あり、あり、觀智國師も是を拜せんとし、此寺前  
あり、是則、此谷の時、師の道貌雄毅尋常なり、と見  
る、乃、其名を問せし、乃、寺に入らば、憇らば、其後當  
寺を以て、植福の地となり、永く師檀の御契約あり  
御崇敬あり、屢師を宮中へ清せし、法要を聽受かり、待たる  
心を殊なり、是を親王に比せし、師と、來興し、殿階を昇る、と  
感得せし、以て、永式とす、今に至り、時、寺境隘狭なり、と

大城は接近せし是乃此谷に依る今の地に移さる大資財と  
喜捨し殿堂房室に至りて悉く營建し最宏壯の大梵  
刹とす事跡合考は慶長十年己巳本堂  
於此浄家の宗教一時  
勃興し念佛の聲天下に洋々たる  
今夜祥夢を感て師微笑しく云く休其夢と  
齋け吾買んん師曰く吉徴あり慎て  
人を擧ふ既やて翁云く増上寺軒端の歯本繫  
人なればことなる由浄土高僧傳に  
抑當山ハ関東浄刹の冠首中々龍象の聚る所實は靈山  
會上布金紺園也と比まらん數百戸の学寮ハ疊々しく  
軒端を輾り支院ハ三十餘宇靡くして一毫を連るる三千  
餘の大衆ハ常にあふ集る中やも能化ハ一代の法蔵を胸間  
貯へ所化ハ十二の教文を眼裡に晒せり三心即一の窓の前  
わち五念四修の月を弄ひ事理俱頓の林花中や々実報受  
用の花を詠す佛閣の莊麗る七宝莊嚴の浄土も又此と

去る事遠くを思ひし

御忌参 二月 涅槃會 二月 誕生會 四月 開山忌 七月 十八日 修驗 山慈母寺  
十夜法會 十月 六日 同日 五日 修驗 近在の末寺より此を法會に修

飯倉

飯倉神明宮 同東の方神明町にあり 江戸名所記等には此谷神明とあり今俗間芝神明と稱す

其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なり 或云赤羽の南小

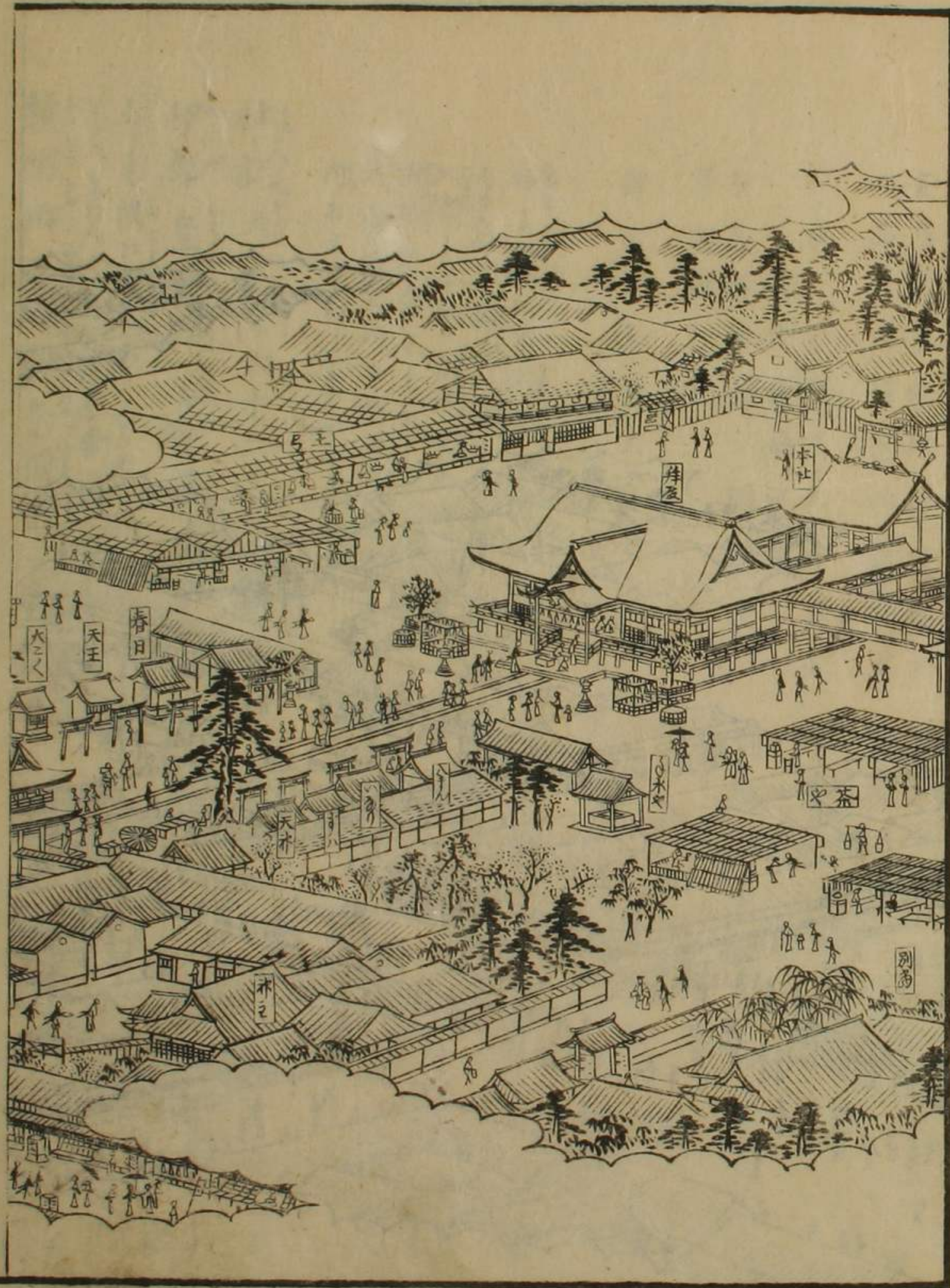
山神明宮の地なりとも 社司ハ西東氏 名所記に往古當社の神

人ヲ招く神主とすと云 別當ハ金剛院と号 其其餘社家巫女あり

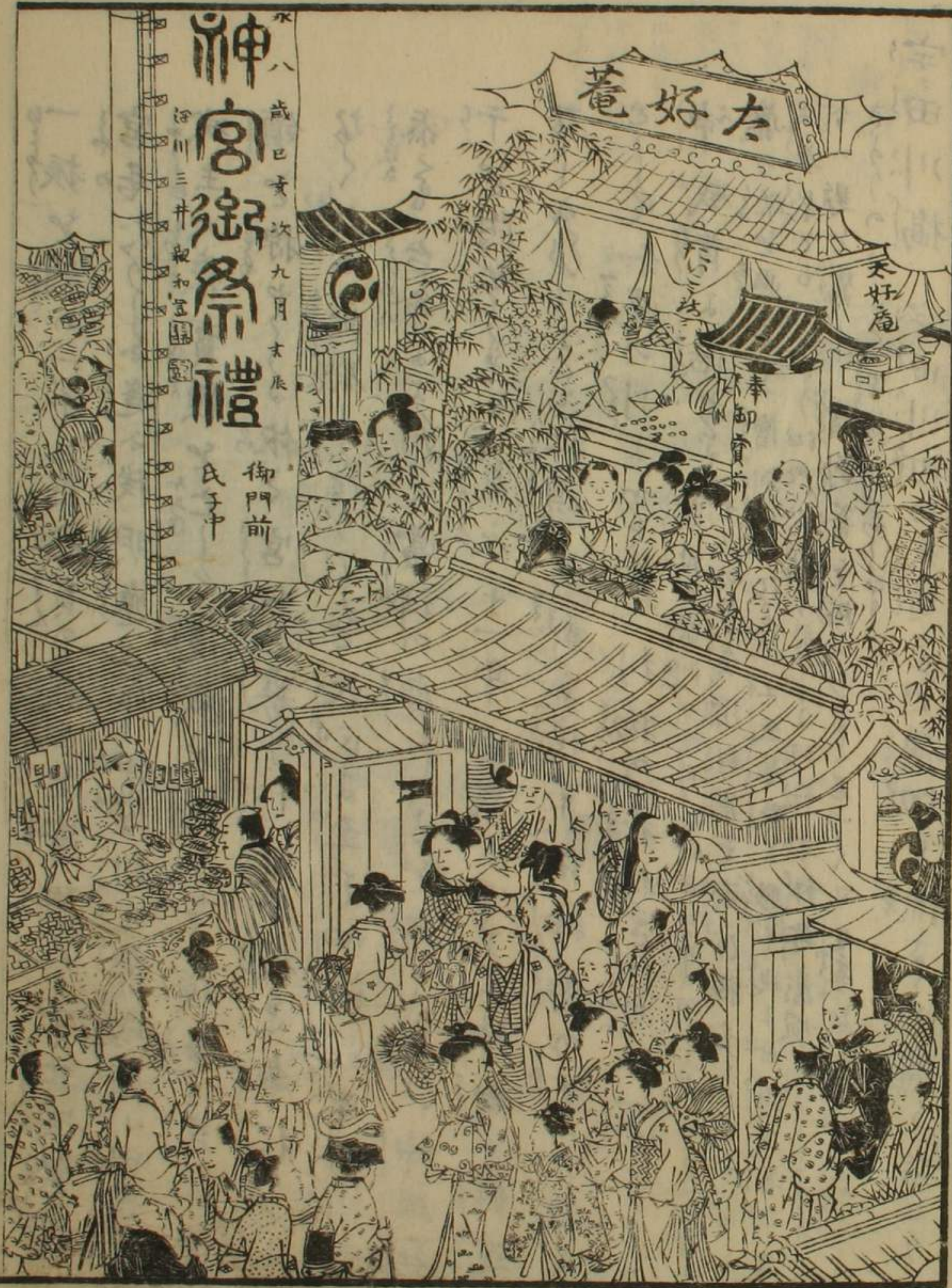
神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 當時四貫文  
同書又曰 飯倉御厨 長日 御幣五十丁

東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉

寄附而村於二所大神宮去永曆元年二月御出  
京之類感靈夢之後當宮御依仰興他社然者  
平家類等在伊國之由相觸之由於祠宮  
時者雖為凶賊之勢在御鎮座之事由於所  
無左右不可亂入神明御座之事由於所  
被仰也謂件兩所宜荒木田成長神主外宮御分







一振と納め一千三百餘貫の美田を寄附あり其頃繁昌の  
 宮居たりし後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北  
 城主大森實頼と亡く後威と遅らせ頃是れ為に神  
 領を掠せし依宮社ハ霧ハ朽風ハ破き奉祀の人も  
 なく大ニ荒廢したりしと天正ニ至ると四海昌平の時  
 忝も台命より當社の廢れしを興へし神領若  
 干と附せし又寛永十一年甲戌より神殿を修造  
 たりしと社頭舊觀を復す依神燈の光ハ赫々  
 としく和光の月よあそり利物の花ゆさハ白く深く  
 神威昔も倍せし當社の祭例ハ九月十六日同十一日ハ廿日ハ  
至るの参詣群集を商ひ物盛き中めと  
藤の花を画きける繪割菴花ハ土生薑珠ハ故世俗生薑市又  
生薑茶とも唱へり江ノ名町ハ生薑村ハ生薑物多しとあれと  
今ハ題と齋り繪割菴を俗よちきと名づく又生薑を賣りハ丸之  
きりりのりめくけとてあり  
 宇田川橋 宇田川町の大通りと横切く流る小溝ニ架せり



日比谷  
 箱荷社  
 毎年初午祭ハ二日  
 三丁目の石の横中へ  
 後を補理ひ律典  
 此邊の番昌  
 あり

鳥森  
稻荷社



今ハ上ノ土を覆ふたふ橋の形と尖を

宇田或ハ  
宇多ノ作

小田原北條

家の臣宇多川和泉守とつゝ人架せしと云傳ハ

小田原北條  
四年上杉修理亮

朝興北条氏總は責らしと品川表ゆく戦を云奈下よ氏總朝興と云傳ハ

實戰ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともふやハ什普清彦ん  
ころよ沙汰せとあり東海道驛路鈴ヶ長禄元年丁丑四月八日大田道清は  
うつゝ其後宇多川和泉守長清ハ品川の館に住とあり又元禄開板の江戸鹿子と  
つゝ草紙は昔此所へ宇田といふ刀と墮しつゝ此名ありといふ也燈とせふ

日比谷稻荷祠芝口三丁目西の裏通よりあり

此所町中至く狭し  
土人田舎町と云す

本山方比修驗寂靜院別當より萬治の頃藍屋五兵衛と

つゝ者託宣は依く花洛藤森の稻荷を勧清かせしや

つゝ日比谷昔ハ比谷ノ谷ノ作小田原北条家の所領役帳也  
比谷ノ作此地と大胡宮内此補所領の中に加ふ

鳥森稻荷社幸橋より二丁中の方酒井下野侯邸の北比

横通よりあり往古よりの鎮座といふと年歴来由共詳

な元禄開板の江戸鹿子とつゝ草紙は天慶年間藤原  
梨卿將門退治の時の勸清なりといふも信し

又如何

あるありしや當社の神宝は古き鯿口一口を納む

表元暦  
元甲辰年



藪小路

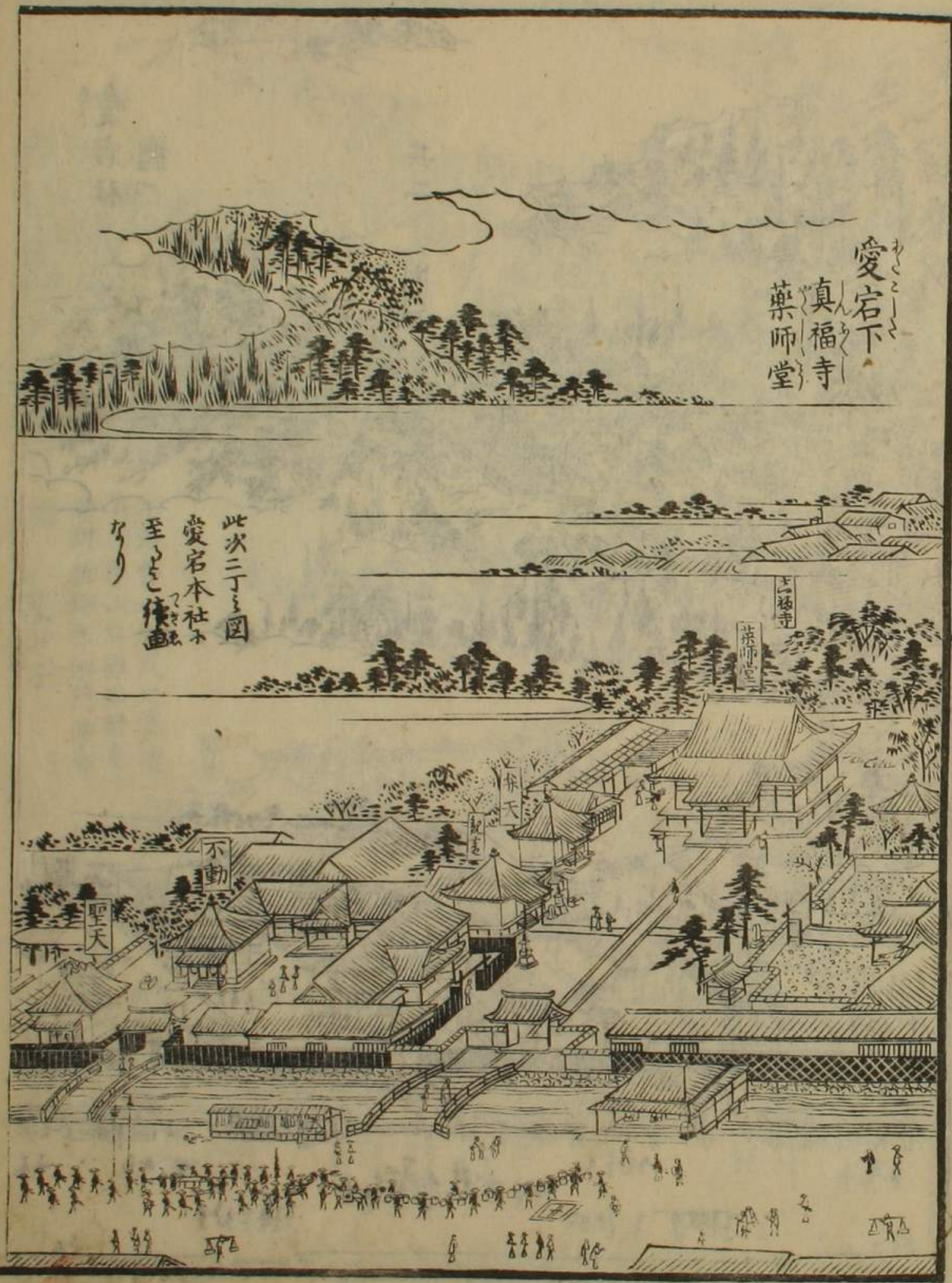
藪小路 愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通を云同所良  
 の隈裏門の傍は必しとらるる此竹叢あり故はあついでし  
 其来由詳ならず傳説あれども燈とあついでし  
 三斎屋此地に住せしとてその庭中の  
 小池と三斎屋と号くといふ

慶長より寛永の  
 頃に至り細川

古河御所  
 足利成氏願書一通 蔵す  
 稻荷大明神願書事  
 今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書  
 之狀如件  
 亨德四年正月五日  
 左兵衛督源朝臣  
 成氏判

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所と云ふ日比谷稻荷の條下に云く  
 此宮地ハ借地ありありと彫付絶はありありと項稻荷の神宮守は古て古来より  
 燈地なりと彫付ありありと宮守ハ此燈はありありと宮居つてありありと  
 當社の事を誤りてありありと明曆の冊録ハ奇端ありありハ其後社の迎  
 除地と 社司山田氏を 柳宮河連歌の河連衆より 別當ハ快長院と  
 号しとて 本山方の修驗なりと祭禮毎年二月初午は執行は 幸橋御門は假屋  
 移は參詣群集して賑はり





愛宕山下  
真福寺  
薬師堂

此三丁と因  
愛宕本社  
至とて後  
なり

櫻川 同所愛宕の麓と東南へ流る溝川とあり名く新  
 著聞集は昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑あり  
 畔は櫻樹幾株ともなくあり其中を流るる櫻川と  
 下流は宇田川橋の方へ流る又三徳山よ  
 傍に金杉の川も流る

摩尼珠山真福寺 櫻川の西岸は傍にあり新義の真言宗  
 江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊  
 薬師如来の靈像弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領  
 主浅野長政當寺中興照海上人を以て自らの等身は薬師  
 佛の像を手刻せし件の靈佛を其胎中の龍なること  
 毎月八日十二日八日縁日

愛宕山推現社 同南に並ぶ世俗城州愛宕山は同一とて  
 自ら別なり本地佛は毘摩地蔵尊あり行基大士の作  
 なり永く火災を退けよみの守護神なり樓門の金剛力士ハ



京洛移迁座武州築檀  
 構函陟山丘誰知帶帛  
 神封物却作沙門活命  
 謀  
 羅山子



其二

愛宕社  
總門

女殿

其三

山上  
愛宕山權現  
本社園



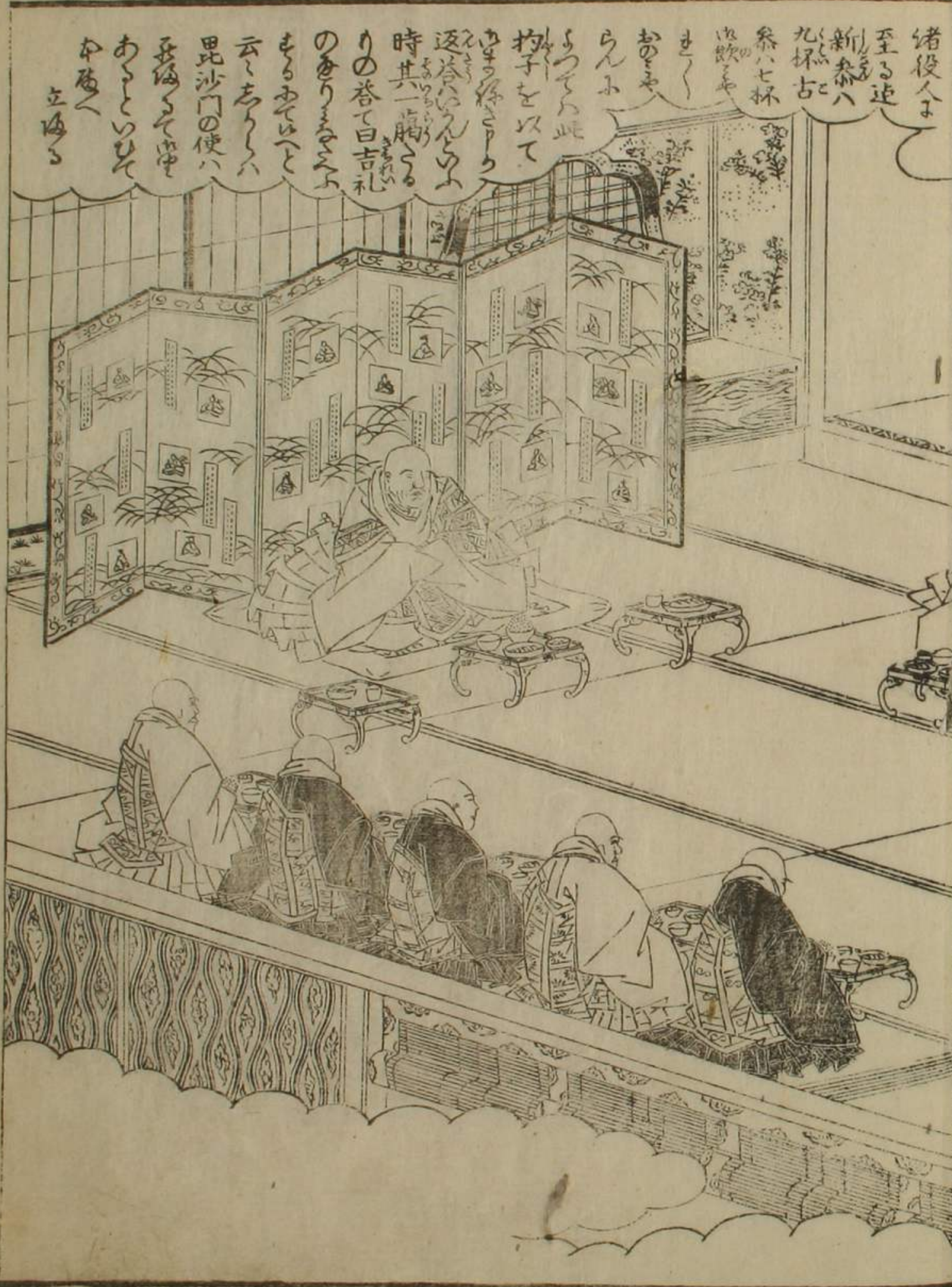
宕山高倚勝軍宮  
晴日登臨積水東  
江樹千里連關下  
海雲一半傍城中  
祇憐精衛仍含木  
誰識鳴蜩忽擊風  
羞殺魚鹽都會地  
治生無似陶朱公

服元齋



運慶の作同二階の軒一掲一愛宕山の三字ハ智積院推  
大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下ニあり新義の  
真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と  
號を二世俊賀上人と云四箇寺ハ湯島根生院本所彌勒寺  
當所真福寺並ニ當寺トリ  
神證上人字を春音といひ俊賀上人字を春香といひ下野の人なりて姓を  
盛谷氏母ハ皆川氏なり元和五年 鈞命ハ依テ金剛院ニ退居せり  
天年を終ニ春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院  
滿藏院鏡照院壽柱院等ハ六院あり俊賀上人字ハ圓精と号し野州  
西が邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱ハ俊賀父ハ伊勢守近律神  
祠ハ前ニ産す其始下妻の圓福寺ニ住を然るニ其項下從結城の元壽上州  
松井田秀第等一世の蒙俊賀上人とあはせ新義の三傑と稱せり  
元和五年俊賀上人愛宕權現の別當ニ命せられ共ニ圓福寺の号とみく一字と  
關ハ俊賀上人ハ永く大法幢と樹大法鼓と擊夏冬廢るるハ其後ハ權林職と  
稱し學徒業ハ云々云々の如く此ハ川のゆき起る實ハ江城權林の權林職  
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺行化の時當  
社の本地將軍地藏尊の像を彫刻しあひ後安部内親王  
奉弟四十六代 孝謙 天皇の御子なり親王則彼地ニ宝祠と營是ト安置カ  
然るハ天正十年壬午の夏 台棋泉州を

發しあひ大和路より宇治を經く江州信樂に入せ賜ふ此時  
多羅尾四郎右衛門といふ者の宅ニ舎らせらるる頃ある  
此像と獻を多羅尾家譜ハ左京進光俊初々多羅尾と号し  
光綱江州信樂と號す云々多羅尾ハ四郎左衛門ハ其子四郎兵衛  
あつす四郎兵衛光綱入道道賀のりなり其節同國磯尾村の  
沙門神燈といふと供せし此靈像を持して東國ニ赴り  
爾より 御出陣毎ニ神燈と云々此勝軍地藏尊と祈念  
せしめ遂ニ慶長八年癸卯の夏 台命より同庚  
子年石川六郎左衛門尉當山を闢き假ニ堂宇を造建し  
あひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立元和三  
丁巳同國豊島郡王子邑ニ於て百石の社領を附しあひ  
とてつと 惣鹿子といふ冊子ニ此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といふ人の  
修せし地也山後征伐の時沙門春音慶長庚子の御出陣ハ勝軍の法を  
慶長八年九月廿四日貴賤の恭詣を許さるる當社と御建立ありと云々又同書  
又慶長八年九月廿四日貴賤の恭詣を許さるる當社と御建立ありと云々又同書  
又慶長八年九月廿四日貴賤の恭詣を許さるる當社と御建立ありと云々又同書



緒役人よ  
 至る連  
 新森八  
 九杯古  
 糸七杯  
 内飲毛  
 まく  
 おのそ  
 らんふ  
 ろつてん此  
 拘子を以て  
 返答いんふ  
 時其一觸  
 りの答て曰吉礼  
 のきりまふふ  
 云くあつて  
 毘沙門の使ハ  
 長海くく中  
 あつていひ  
 中座  
 立海

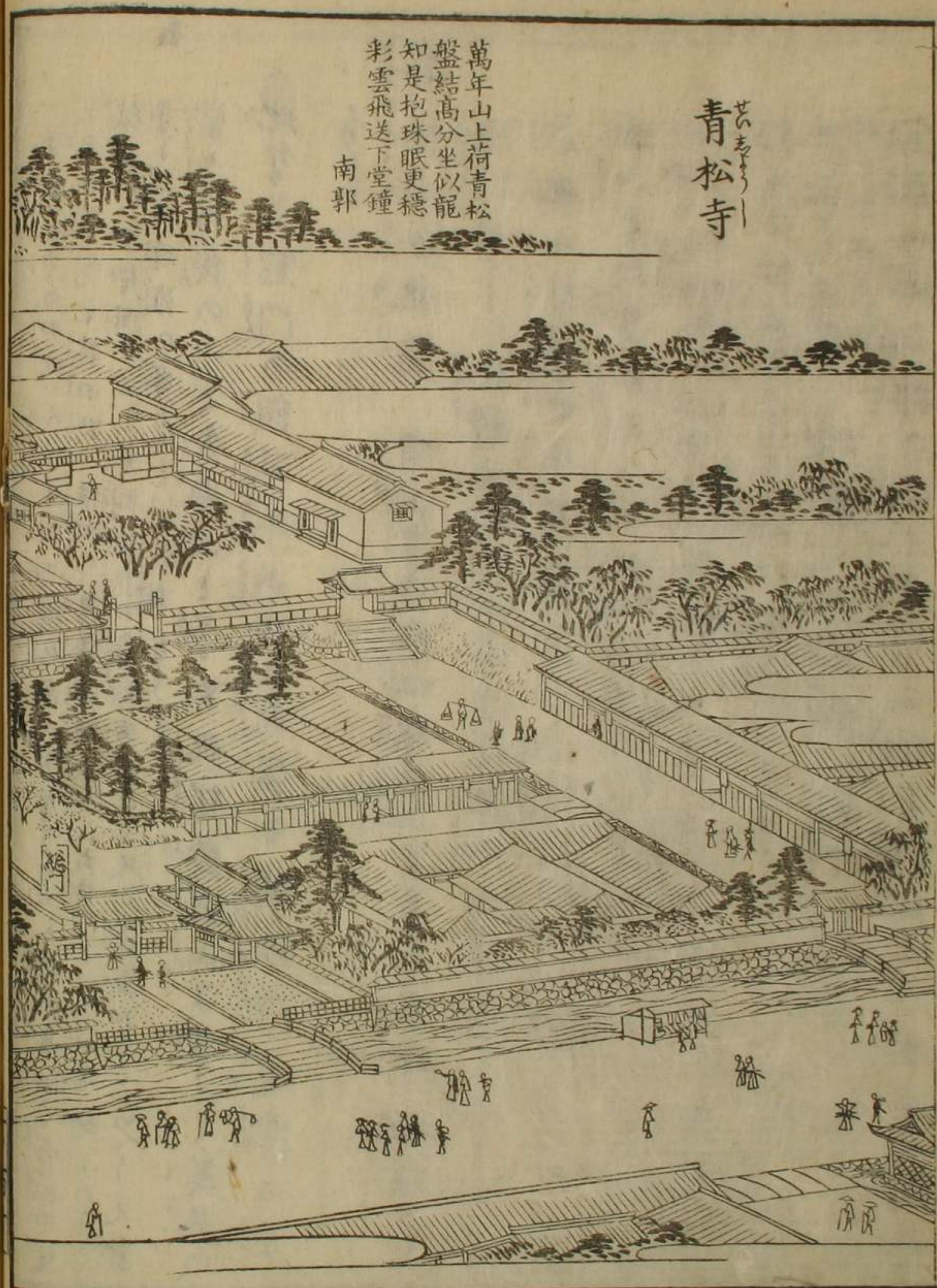
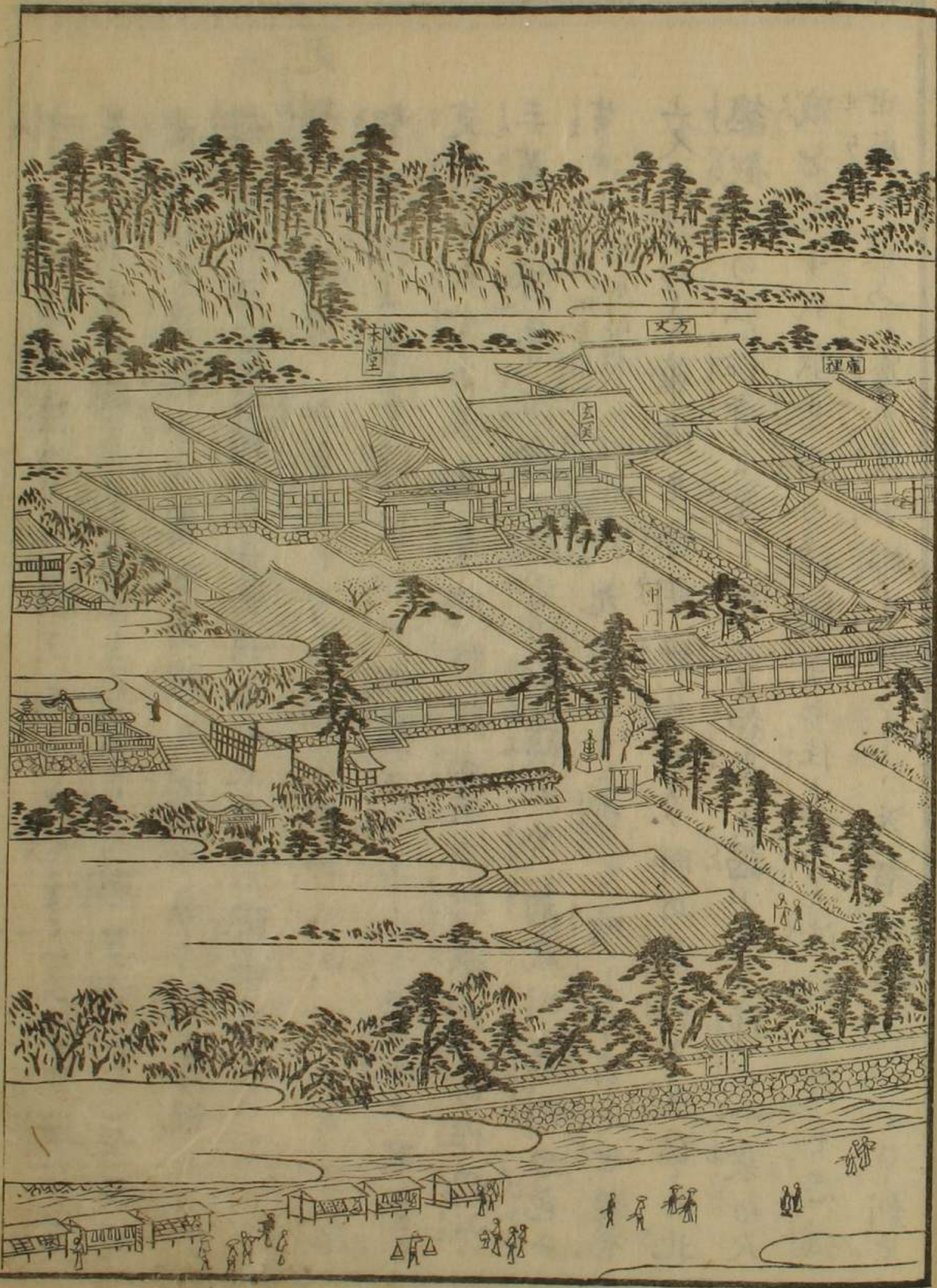


愛宕山田福寺毘沙門の使ハ毎歳正月  
 三日小修行女坂の上愛宕とつる  
 若肆のあつて向例てんを勤む  
 この日寺主と始と支院ありも  
 出頭して其次第あり座を備け  
 強飯を食ま半お至る頃毘沙門  
 の使と称する者麻上下を著し  
 長さ太刀を佩雷槌を差添又  
 大なる飯うのを杖小突初春の  
 飾り物もて衆と造り是を冠  
 相隨ふりの三人共本殿あり  
 男坂あり田福寺  
 お入て此席お至り  
 粗机ありて往  
 飯をとりて三度  
 魚板をつさる  
 して曰  
 まつりあつる  
 者ハ毘沙門天の  
 内使院家後者  
 をじゆ寺中の  
 面々長屋の  
 所化も勝手の

とあり此説福寺云は... 登りて澄とて入る... 此山の地主神ハ毘沙門天なりとて  
今も社殿の相殿ハ安置を毎歳正月三日毘沙門の徳と稱する舊社の式あり其式画上に詳  
るり按て當寺開山後賀師ハ始野州よりあり野州返りてくらの強飯の式ありて世小所謂  
日光の古式小僧少く當寺は行方りのも恐らくハ俊賀上人より始りたるん故  
抑當山ハ懸岸壁立し空を凌ぎ六十八級の石階ハ疊くとし  
雲と挿ぐやく聳然り山頂ハ松柏鬱茂し夏日とつくと  
あつ登りてハ涼風凜々として此の如く災暑をこそ見る見落甚  
三條九陌の万戸千門ハ慶をつつと移る所せく海水ハ剛馬と  
ゆけけく千里の風光と貯へ尤美景の地なりと月ごと此世買ハ  
縁日と稱しと参詣多くとりて六月廿四日ハ十日と号  
けく貴賤の群參指麻の如く縁日といふ植木の神立り四時此  
萬年山青松寺 同南隣る曹洞派の禪刹ありて江戸  
三箇寺の一員とて在りてハ釋迦如来開山を雲崗俊徳大  
和尚といひ文明年間太田左衛門佐持資草創を初と具  
塚の地よりしと後或云天正此地より遷る 故に今も俗に貝塚  
又慶長に 青松寺と稱せり

一ハ青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐  
と云人草創を其旧跡ハ桃町の貝塚當時玉虫八太坊門といふ屋鋪ありて  
彼墓と甲斐塚と云と菊岡治涼ハ青松宮内と云人の建立なりといふ又當  
寺ハ太田道灌の塚ありといふ詳ならず  
當寺の後の山を合海山と号く眺望愛宕山より等しく美景の  
地なりと惣門の額万年山の三大字を閩沙門道霈の筆  
ありと

勝林山金地院 増上寺の西切通の上にあつて京師南禪寺の  
塔頭中々南禪寺は宿寺なり五山の僧録と稱する本寺ハ  
唐佛の聖觀世音菩薩なり 或人云宋人陳和卿が作なりといふ  
毎月十八日觀音懺法修持す  
閑山を大業和尚と云其頃碩学なりて五山の僧録司に命ぜり  
都留の毛衣と云草紙ハ古ハ寺社裁許のり金地院 境内ハ青葉楓と  
稱する古木ありて今ハ焼亡ひくかりやのへ  
頃ハ物あり後此地へ 閻魔王ハ石像ハ塔中ニ玄庵の前にあつて  
宝永の頃南部の領主靈尔ハ依りて彼地より麻布の別荘ハ



青松寺

萬年山上荷青松  
盤結高分坐似龍  
知是抱珠眠更穩  
彩雲飛送下堂鐘  
南郭

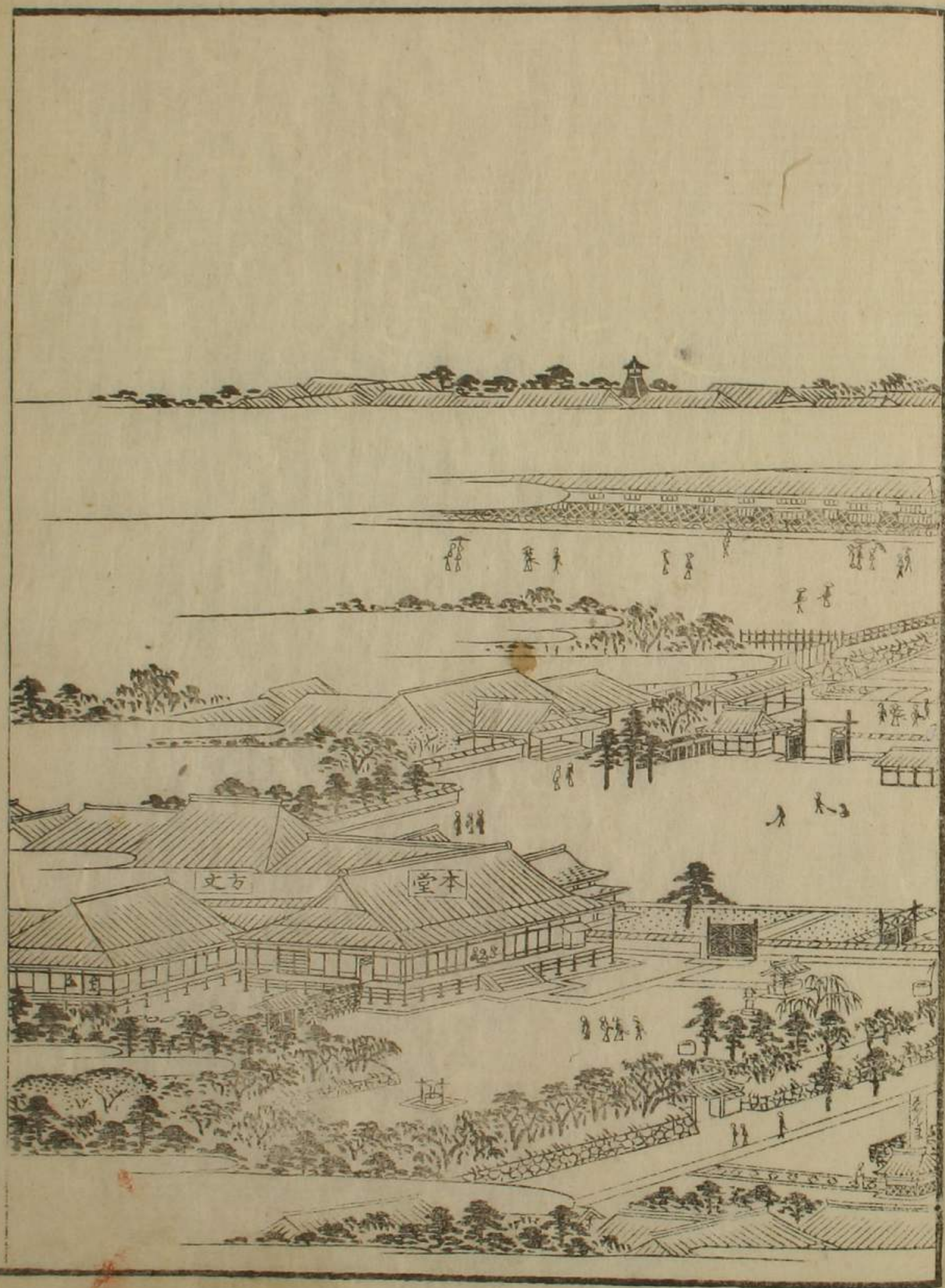
延され再び威靈あふふり又ふ安をいふ金地院と書  
せし三大字の額を水雲写しあり方丈同津溟筆薦福殿  
岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆あり本尊觀世音の  
像ハ大の月二月續々中の月の十八日ハ開帳あり

光明山天徳寺 和合院と号し西久保神谷町にあり花洛  
智恩院ハ属し浄家江戸四箇の一申す紫衣の地とす  
支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開六  
三蓮社縁譽称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑小  
生る父ハ藤田左衛門尉道昭と云九歳より甫て増上寺弟七世親譽  
上人に後つゝ難波を聰明絶倫なり師の遷化に及びし北  
總飯沼の弘経寺に至り鎮譽和尚に謁し浄土一乘の大  
戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉し志猶  
世塵を厭ふるが故に後古郷に歸りて天智庵或ハ又と草創を

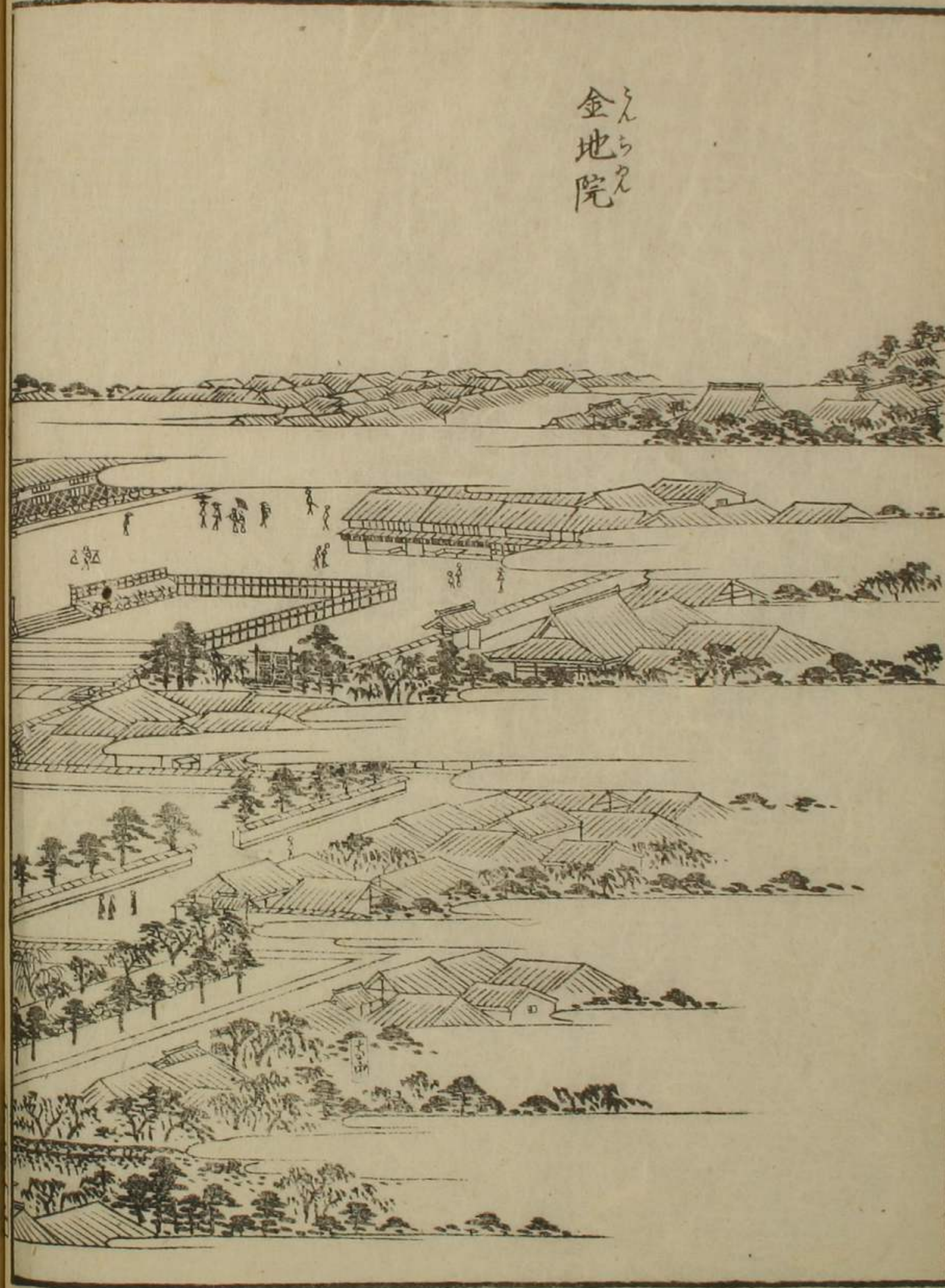
今の天徳寺是なり天徳二年の草創といふ先師親譽を以て開山祖とす  
師弥道世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひし浴の知恩院に  
至り傍に一精舎を建てる住し是を一院と号し一院ハ念佛三昧の本寺に  
昼夜不退し常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製  
し永世の標準とす今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩  
とす花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院挂の極樂寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創せり  
の道場とす念佛三昧の天文廿三年の秋一心院に寂し實は七月十九日あり  
化壽四十一とす今世間用ゆ所の二連數珠も師の製する所  
此念珠を用ひ

城山 西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の  
城跡といひ傳ふるを誤らるる一昔熊谷氏の人居宅杯を  
一地名らん同所神谷町に在る所の石橋を熊谷橋と号すも  
故あるとれと今傳説詳ならず熊谷岡治涼云此所ハ昔麻布殿と云の出丸の地ありと云





金地院



太田道灌城跡 或ハ番神山と号シ西窪仙石家弟宅の地なり  
紫の一本よみ 今土取場となりて壘崩せしと云  
 又昔此地小堂ありて土佛の釋迦を安置シ法華堂と号ク後豆州玉澤法華寺の日朗上人持念せる所の墨画の三十番神の画影と携来すあまきき 諸人と結縁けりえん せし然しか 小田原北条氏後のち 社を建た 彼番神を勸請くわんじゆ 故ゆゑ 番神山と号シ其画像ハ後京師に移うつ せしとあり

西窪八幡宮 同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町一丁目よあり別當ハ天台宗中ちゆう 東叡山の末八幡山普門院と号シ西窪の鎮守なりちんじゆ 旅所ハ小山あり相傳あひた 當社ハ幡宮ハ寛弘年間かんこうねん の鎮座なりとシ慶長五年関原一戦の時崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書とありらと別當秀圓御祈禱修行ごきんたうしゆいん せしと云々其奇特ありと云ハ

西久保八幡宮



寛永十一年甲戌二月終つひ宮社御建立ありしとてり祭禮ハ

毎歲八月十五日なり

飯倉 西穴注の南を云此地ハ往古伊勢大神宮の神厨の地とて

故ゆゑ其河饌料の稻を収め倉を飯倉と唱へり

地名よ呼よるるなり

地と鎮ちせしり北条家の所領しよ御代懐おんよえり

所しよの北条家人越山左衛門大夫政景元龜二年江戸あり五十五貫六百八十五文

其地を彼寺かに寄附せり料り飯倉の地名あり此中三貫三百文ハ必前あり

神樂抄かみ轉ま鑑かの書と引換ひとせり照合せり

熊野権現宮 飯倉町いあり或人云養老年間芝の海濱に

勸請ありしとて遙の後今の地に移さるとも別當べつを三集山

正宮寺といひ天台宗中ちゆう東叡山とうに属せり

勝手原 土器町より赤羽へ出る廣小路の辺といふ昔ハ三田の

方へりけく廣莫の原野なり

飯倉  
熊野権現社

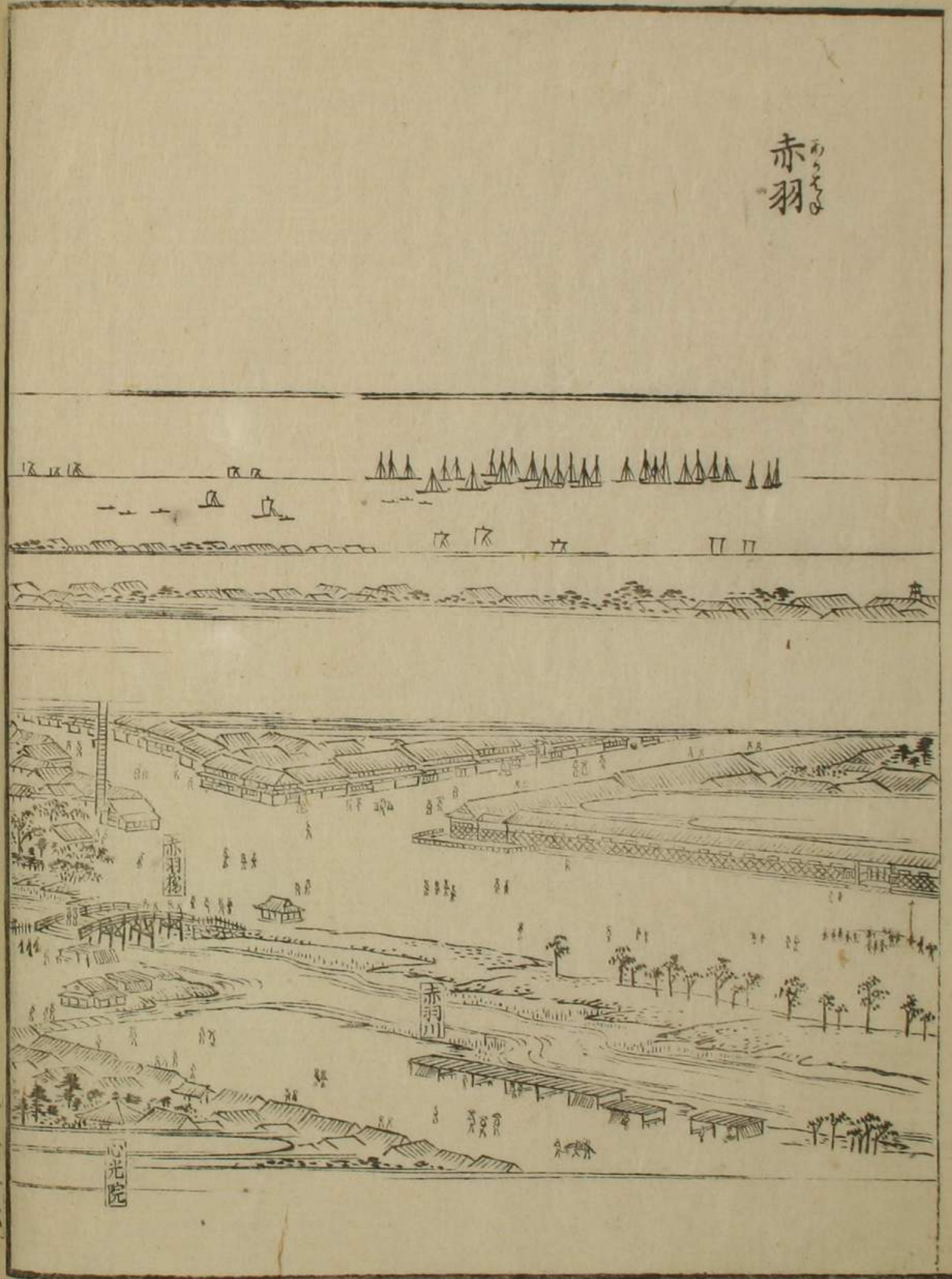


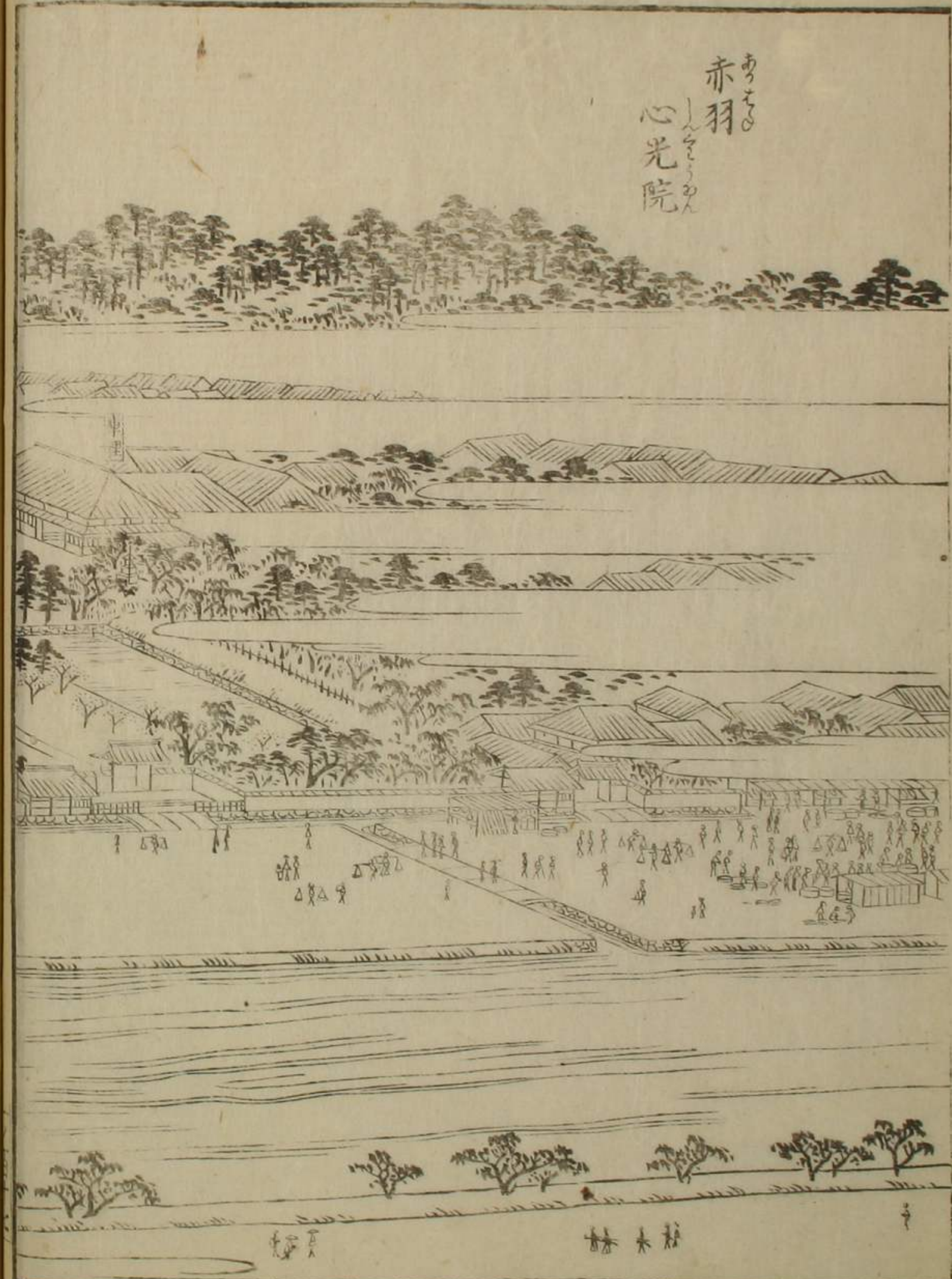


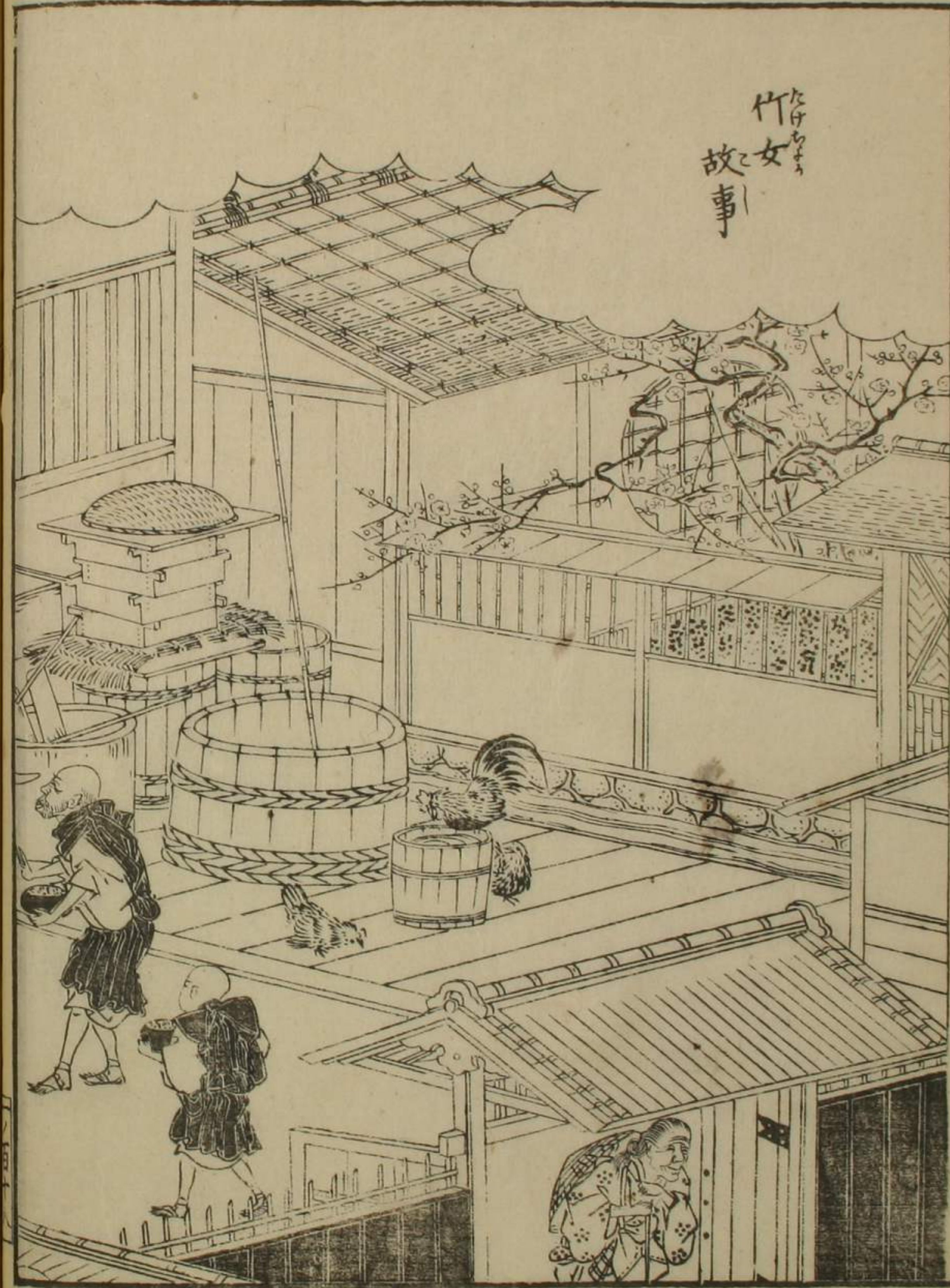
丹鳳城南赤羽濱  
 郊天晴近五雲新  
 芝山樹擁銀臺色  
 麻谷流侵碧海春  
 客裡攜家羞白髮  
 人間卜地避紅塵  
 少年車馬休相汚  
 沐罷聊裁頭上巾  
 南郭



赤羽







平安記行

文政十あまり二年は頃水無月のをりつと土さく  
さけくとう旅人の名はりのせ避暑の床をさるれて  
都みまうのほりね中界芝といふ所を過るとて

露

一々道の芝生と踏ちりし駒に任するあきられの免

太田道灌

田國雜記

芝の浦といふ所ありなれは塩屋のなつらちなひま  
て物淋しき塩木をこ舟とりて見て

やくねり藻汐の煙名を立舟にこりつひ芝の浦人

道真  
准后

此浦を過くあり井といへる所みて云く

江戸めて

芝といふもの候夏さし紀

梅翁

御徳神社

同所本芝通りより西の横町あり本芝此

産土神やま祭禮ハ三月十五日なるを別當を正福寺こ

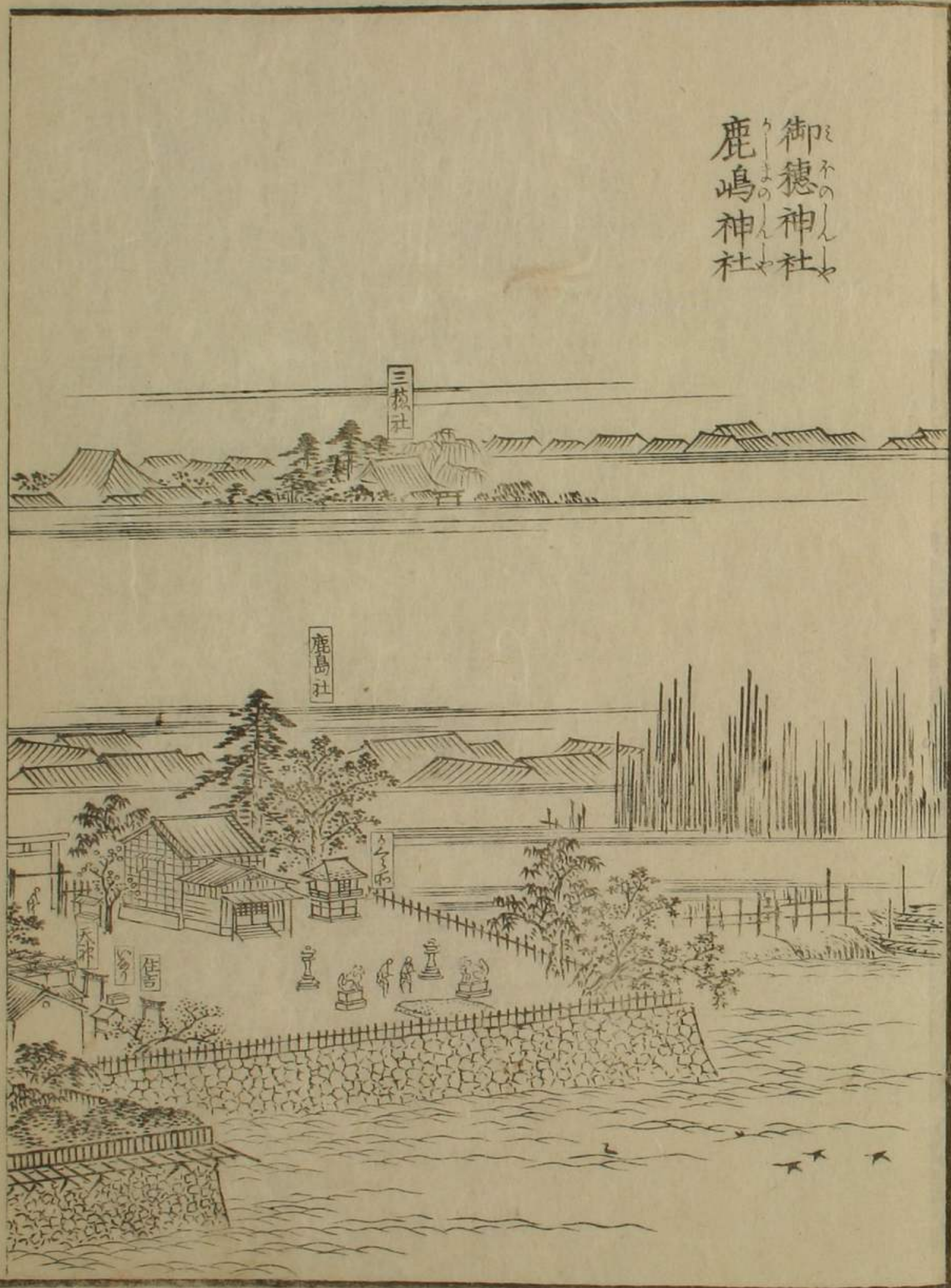
号す天台宗もて東嶺山は属を傳へ云往古駿河國三徳の

海人此浦に来るを住む故に古郷の御神あれとて文明

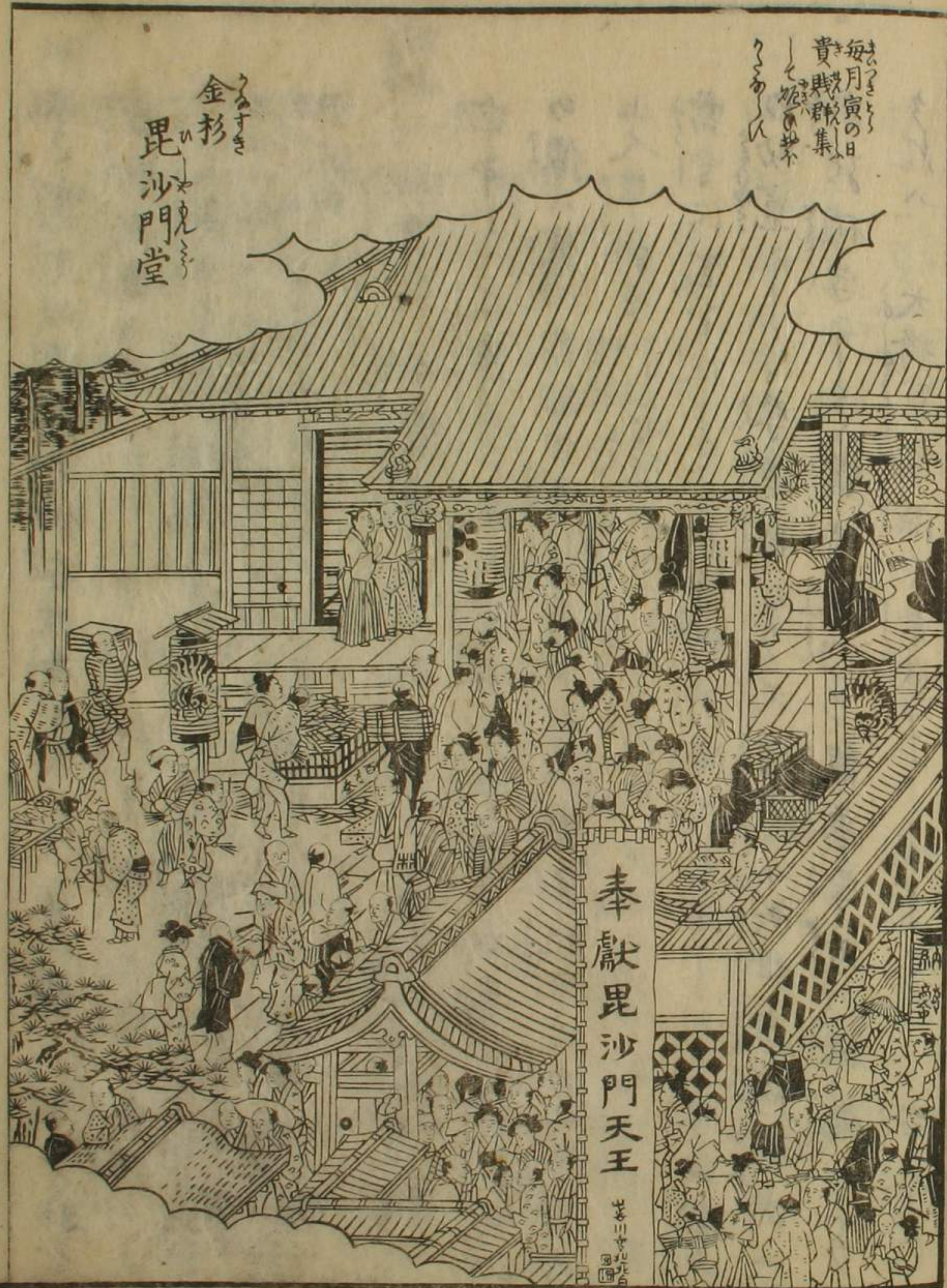
十一年庚子のとこみ當社を勧請せしむる祭神

御徳津彦御徳津媛等ハ二神なりといふと  
土俗當社を  
燈籠の

御徳神社  
鹿嶋神社







金杉  
毘沙門堂

毎月寅の日  
貴賤群集  
して賑ひ奉る  
ことあり

奉獻毘沙門天王

守護神とし祈願  
鹿島神社 同所海濱あり別當ハ御徳神社に相同  
祭禮も又同く三月十五日なりと土人傳へ云寛永年間此  
浦一の小祠漂流して汀止るあり漁人こゝを揚ぐ其  
本所を尋るゝ常州鹿島大神宮の社地ありり小祠あり  
くつり又其頃十一面觀音の木像同く海汀に流るる  
りハ鹿島明神も十一面觀音を以て本地佛とせしあれハ  
是れ小祠とす當社の御神を勧請せしとあり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路あり松林山  
正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境ありと本堂を  
傳教大師の作ゆへ後日親上人再び點眼供養せし  
とを往古ハ攝州梶折邑一乗寺といへる寺ありりとも僻  
地ゆへ縁の人少し 一乗寺ハ金杉寺といひ真言の密場なり  
と時親上人の私教は歸して本化の宗は改む

正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境ありと本堂を  
傳教大師の作ゆへ後日親上人再び點眼供養せし  
とを往古ハ攝州梶折邑一乗寺といへる寺ありりとも僻  
地ゆへ縁の人少し 一乗寺ハ金杉寺といひ真言の密場なり  
と時親上人の私教は歸して本化の宗は改む

依く寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し住すと其を  
靈驗感應の著しき寺記に詳なり故に恭詣の貴賤日こ  
多く寅日を殊に群集せり正月初の寅日恭詣の人大方ハ其の神明  
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣りて燧石をもちて掃く輩あり  
燧石を買ふ家土産といふを各著しと云これ準とす日親堂日親上人の  
像を安んず

田中山西應寺 金杉の通より西の裏にあり門前を西應寺と云ふ浄土

宗中々々三縁山に属を支院三字あり本尊阿弥陀如来

の像ハ慧心僧都の作なりと云傳ハ應安紀元戊申の年明賢

上人草創を明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘  
十日遷化を年八十六歳といふ天正の頃 大將軍家

當寺に駕を枉せられ寺領寄附ありしハ学徒朝夕

の助竟々々々学道盛なり又當寺十六世存問和尚一

宗に碩学ゆ々々々當時法門の龍象学道の麟鶴なり

これハ 大將軍家深く崇敬よりこゝにあり 台命に

依く一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧ハ宗風の法意を  
示すべく念佛三昧他力往生のをこゝに日々大弘ま

三田 或ハ河田及び其多々作ると古神領に寄りて地を所田  
と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云

武藏國風土記殘篇云 荏原郡御田郷或其多

公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵□

按此地を渡辺の綱と云ふ誤なり或人云此地ハ三田家の  
旧領中々々三田氏累世に居住す三田家譜ハ三田三河守其子駿河守  
綱勝武州三田に傳を代々綱と云ふ字を名とす依後人渡辺の綱と  
混交へて誤る也と云渡辺系図ハ云源次充武蔵國足立郡其田  
郷に配せらるるとあり三田と云ふの綱ハ三田其田同訓なる故に混雜  
てかる附會の說をハまらざるべし 奮筆文集ハ其田園の  
記と号する所のあり此地を渡辺綱と云ふと云ふ其文ハこゝに  
永祿二年小田原北条家の所領後帳ハ大田新六郎知行三田内壽  
樂寺分同其綱寺屋分又島津新七郎知行三田及中村平次左衛門  
知行三田高福寺分本任坊寺領ハ同所あり惣領分の地等を配すと見  
えり

綱坂 同所松平隱岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮



下る坂を号く此所ハ其田武蔵守の居城跡なり又同所有馬

家の藩邸北南の坂を綱う綱う引坂と号く綱う産湯水

と云ハ同所肥後侯の園中綱う駒繫松と稱するハ隠岐侯の

藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内あり

按ニ窪三田ハ綱生山當光寺と云ハ一向派の寺あり渡辺の綱う出生の地  
なりとのひは又三田ハ幡宮の神跡を渡辺の綱う守護神ありとの  
をへく此辺綱う縁ありの綱う會津家の別荘も綱う家と稱するとの  
ありて塚上の松と懐古松と号けり其田邑ハ源綱ハ陳田園の記と作ら  
其畧ハ云ク武蔵國荏原郡渋谷莊其田邑ハ源綱ハ陳田園の記と作ら  
存を塚上の松と裁く遺蹟を標を則是社氣の綱う散せハ其畧の餘情  
あるとの明曆四戌戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘とし其畧の餘情  
塚を標するハ蓋其の勢を取り古の土を尚く賜ひ別荘とし其畧の餘情  
照合せしむるに此地ハ其田ありハ綱前の三田の氣下ニ詳なり

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり

神幹ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号ハ此所を

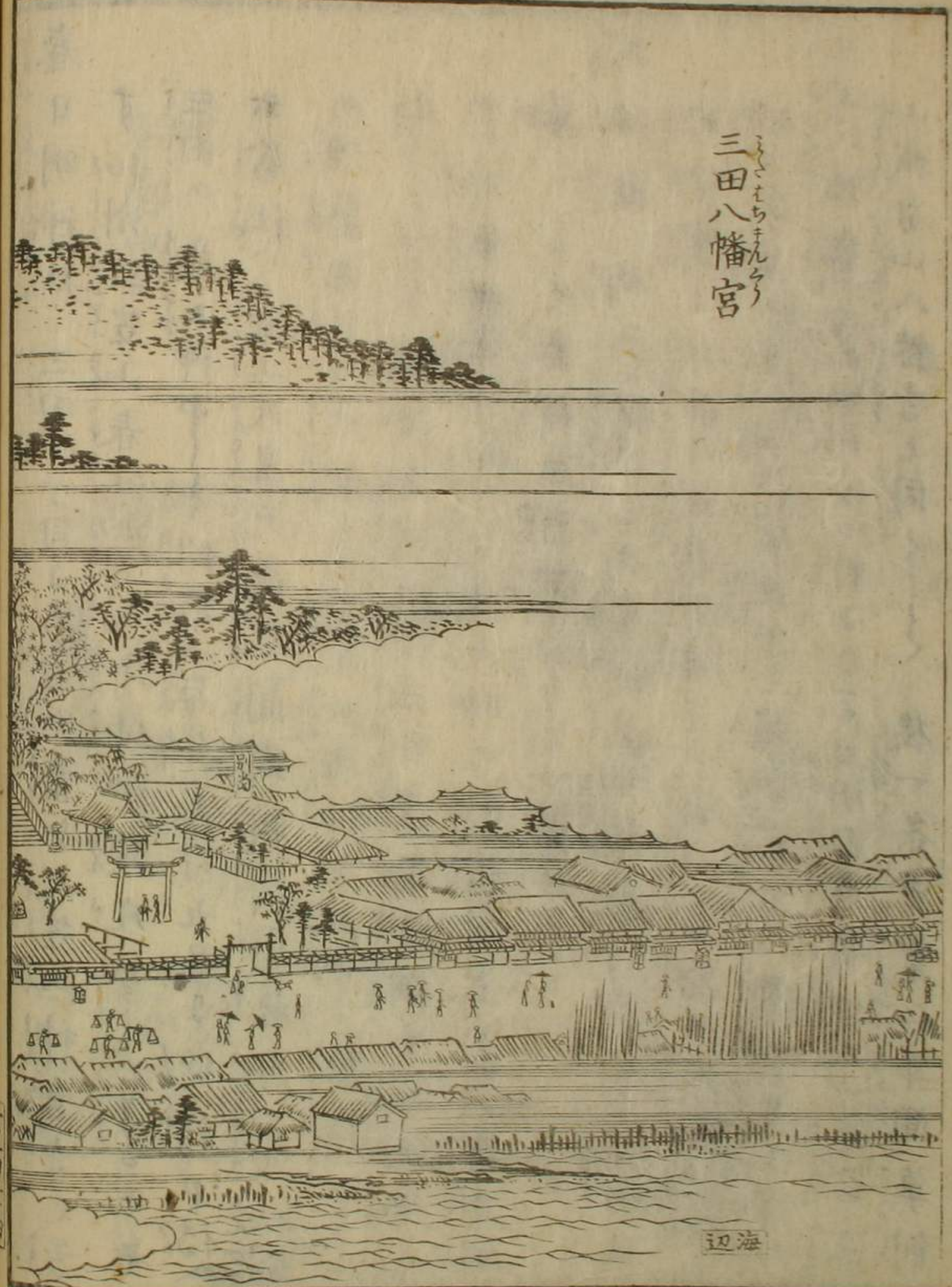
飯倉神明宮の舊地と云ハ誤なり

三田  
春日明神社



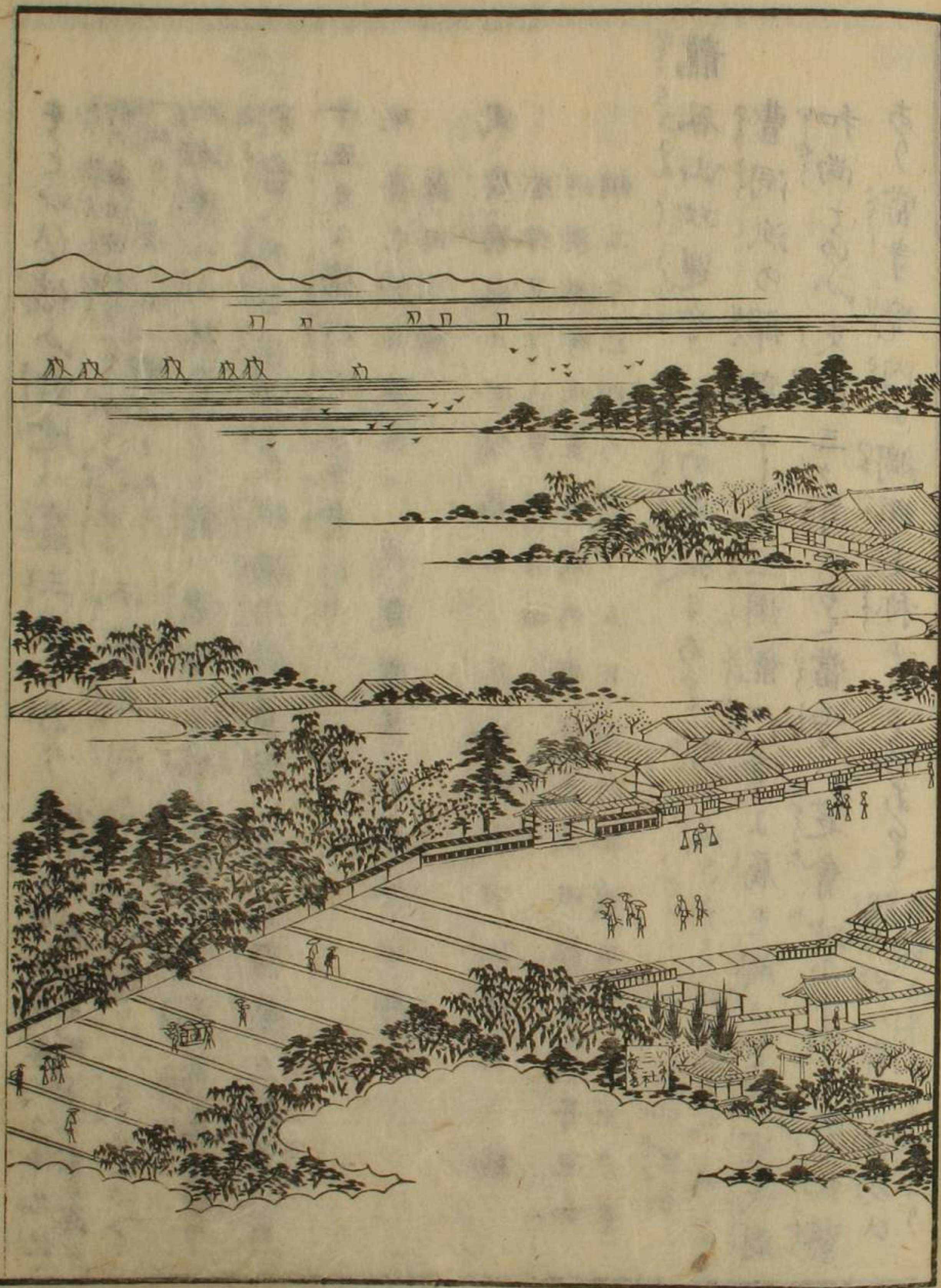
春日明神社

三田一丁目あり別當を三笠山神宮寺と号す  
 和州三笠山春日四所の御神を鎮座なり  
 三田の産土神なり例祭ハ毎年九月九日ニ修祀を傳へ  
 云當社ハ村上天皇天徳年間武蔵國司藤原正房任國  
 の頃藤原氏の宗廟ニ於テ此御神を此地ニ勧請せし  
 むるとあり其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を  
 十一面觀世音なり弘法大師の彫造なりとの慶賢瑞  
 夢より感得の靈佛なりとの傳ふ  
 月波樓同所松平主殿侯別荘の看樓の号なり此地此  
 眺望實ニ洞庭の風景を縮つるやめく岳陽の大觀を摸み  
 似しを依り城南の勝地とを羅山先生の東明集ニ詳ニ  
 三田八幡宮 芝田町七丁目あり三田の惣鎮守なり祭事不  
 山城男山八幡宮と同一なり 後一條帝寛仁年間草創



三田八幡宮

辺海



まといひ傳ふ旧地ハ窪三田あり  
土人云當社の地喜式の神名記  
及ひ武蔵風土記等の書に載る  
此の地後ハ山林ゆゑ前ハ東海ニ臨む故ニ風光秀美なり  
別當ハ天台宗ゆゑ眺海山無量院と号し祭禮ハ隔年八月  
十五日ニ修行を放生會あり  
延喜式神名帳云 武蔵國荏原郡御田郷  
葬田八幡

武蔵國風土記殘篇云 荏原郡御田郷御田八幡  
圭田五十八束三字田 荏原郡御田郷御田八幡  
所祭應神天皇也武内宿禰荒木田襲津彦等也和  
銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戶巫戸等

龍谷山功運寺

同所聖坂あり  
聖坂ハむく此地ハ高野聖多  
住く閑きより坂ありハかく云とそ  
曹洞派の禪窟ゆゑ三州龍門寺ニ屬し閑山を黙室天周  
和尚といふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地ふゝ所化察  
あり當寺境内ニ綱塚と稱するものあり  
綱塚ハ前の三田及ひ  
綱塚の祭下ニ洋なり

周光山濟海寺

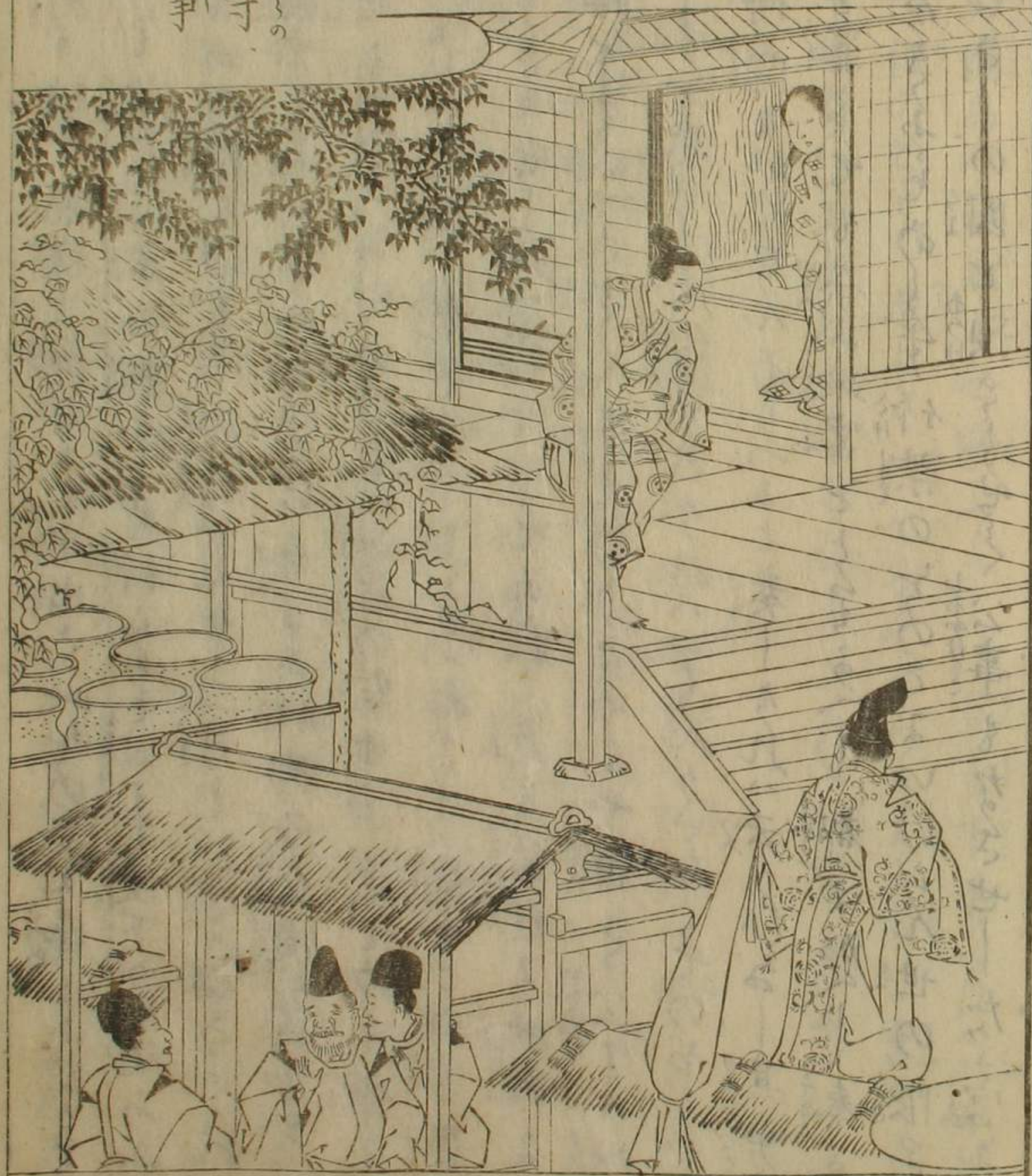
聖坂の上道より左側ニあり浄土宗に  
京師智恩院小屬を上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真  
言の古刹なり中古荒廢ニ逮ぶ依り法誓上人念無和  
尚中興を沖より目當の燈籠あり  
當寺庭中の眺望ハ實ニ絶景なり房總の群山眼下あり  
々々雅趣をくわく々々朝夕ニ漂み釣舟ハ沖ニ小く暮て數點の  
漁火波を燒くや疑はる羣芳發して緑陰深く風露爽小  
々々氷霜潔し四時ニ觀とあり々々風人の眼を疑はる  
一勝地なり月の岬といふ也此辺の惣名なり  
竹柴寺舊址 濟海寺と同隣の土岐侯の邸此地其舊跡あり  
といひ傳ふ 山岡明阿云按今この地ハ海邊あり  
よつて今ハ竹柴寺と號す  
更級日記云 今ハ武蔵國となりぬ殊々さうきありんをり  
更級日記云 今ハ武蔵國となりぬ殊々さうきありんをり

白く波もななくさひらの様ゆく紫生と聞野も蘆荻の  
高く生て馬小乗く弓もくも末見えぬと高く生茂りて  
中を分行ふ竹柴といふ寺あり遙よいさうやといふ  
所は樓の跡礎なとありといはる所を問は是といふ人  
竹柴といふさうなり國の人ありなるを火焚家乃火  
焚衛士よさう奉りたるも御前の庭を掃とく  
あやや苦しきあをみるは我國ふ七川三つ造り  
居る酒壺ふゆ渡りしはゆえの瓢の南風吹の  
北は靡き北風吹の南よなひさ西吹の東は靡き東  
吹の西よあひくを見かくくあるよと獨ちつあやさ  
くはと其時の帝は御むを免いみうかしてはうま  
そまふ只獨り御簾の際に立出あひく柱小寄か  
てく御覽するふこはをのこかく獨りけけいせ

哀よいうなる瓢のいうふ靡なうんといみう床ゆく  
おほされ々まの御簾を押し明くあのをのこあちよんと  
め々れれかこまうり高欄のつふ糸りたるまの  
云つる事今むとかく我ふいひく聞せよと仰られん  
酒壺の夏今むとくへり申々れハ我ぬくいきて見せよ  
さゆ中うありと仰られんまのこかく恐く思ひ  
たれとさうくさあや何んかひあてまつりて下るふ  
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋はりと  
よ此宮を居てまつりて瀬田の橋をひくまをうら  
こほちく夫を飛越く此宮はかきあひ奉りて七日  
七夜といふ武藏國よいさうけきまなり帝后御子  
うせむひねとおほくまといひまをうらむさくは  
國の衛士のをのこなんいせかうさくさりのを首ふ



竹柴寺  
古事



引うけく飛様は逃ると申出さず此をのこす尋ふなうを  
もて論なく本の國小をを行らんと公を使下りて追ふ  
勢田の橋はほまき得行やす三月といふはむさ  
國少のきつきて此をのこす尋ふ此御子公使をわ  
我さうへきみやありん此男の家ゆりてぬく行と  
いひうらぬく來りていひてあうり覺ゆこの男罪  
しきうせしんハ我をいふてあれと是も前世は此國  
跡をきくへきまきくせとありたりや歸る公より此  
しを奏せしと仰らまきんハいんうてあうてのあり  
御門はかくなんありつると奏しんハ云うひるし其男  
を罪しても今ハ此宮をとるし都はかく奉る  
るきあをあし竹柴のまといけらん世の限  
むさ一の國を預とせし公事もなさせし宮

其國あつけ奉らせ賜ふし宣旨下りてんハ此家  
内裡のことく造りて住せたまりたる家を宮なと  
うせむひんくんの寺あなうを竹柴寺とす  
かのと云

龜塚

濟海寺の北に隣りて隱岐家の別荘の地あり  
昔ハ竹柴寺の境内なりしを中興國の頃地を割りて隱岐家の別荘  
多しなり此時龜塚ハ隱岐家内に入ると其塚のまじりて其まの  
建られし龜塚の相傳は往古竹柴の衛士の宅地は酒壺  
碑と稱するあり  
其のまじり一つの靈龜栖居後土人崇めし神は祀ま  
りの頃ありあまらん或時夜もさう風雨あり其翌日  
彼酒壺一堆の石は化せりと云又文明中大田道灌此地  
斥候を置其龜の靈ありとて河圖と号す  
とていふ  
濟海寺の山号を昔ハ龜塚山と唱へし  
祖徠先生墓 三田寺町長松寺といふ浄家の境内あり

祖徠先生墓

三田寺町長松寺といふ浄家の境内あり



碑文ハ倚蘭侯撰

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道  
鄒魯博究物理立言之修辭德崇名垂不朽莫大焉  
呼先生出也如生日之可也其為人卒行狀弟其  
焉嗚呼實出先生之意九日也其有三人其行物部茂  
識矣享保戊申正月洋月十聖日六有文降文運斯人  
卿以字行銘曰洋月十聖日六有文降文運斯人  
云受乃化弘微猷厚大業已成日新富有暇能  
不壽夭棄斯人匪天維棄有司列辰喜我小信暇能  
享神盛德不朽于牖民

魚籃觀音堂 同所淨閑寺とる淨刹ニ安置ハ本尊ハ木像

中々六寸計あり 面相唐女のこころややく右の所は魚籃を  
縁起曰唐元和年間 憲宗の御時天衣を持し 魚籃を  
籃を持し魚を鬻くあり見る人其容貌の麗しきを競ふ

女の云く我性佛経を悦み若夫と通せむ人ありハ夫とせん

云其中馬氏なる人あり是とて依此女とむるに程

なく死せし馬氏悲し堪む日を経て後異僧来り馬氏と

共塚とるる靈骨とて金鎖やなり光を放つ是より

其國こそとて三寶を崇めし心 初金鉢離は應化すまは妙相を

爰に當寺に開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎に遊化の

頃一老婦より此靈像を感得し元和三年丁巳豊前國中

津との地は假し淨舎を営み御座を構へて魚籃院と号し

竟に寛永七年庚午三田の地は奉安せしと称誉上人其地の

所せしと歎き兼應元年壬辰正は今の地に移し當寺を

建立す尔より緇素まめく渴仰し衆人打群く歩を運ぶ

よる靈應のまめく香煙常は風靡き梵唄うたえ林より

こころ

潮見坂



潮見坂

聖坂の南伊四子臺町より。田町九丁目へ下る坂をいふ。或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼ぶ。此坂ハ七崎あり。合せ七崎。潮見崎月岬崎大崎荒蘭崎千代崎長崎崎是等と

伊四子薬師堂

潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあらず寺を醫

王山福昌寺と号す。天台宗城琳

本尊薬師佛の像ハ智證大

師の作也。右大将頼朝卿の念持佛なり。と云ふ。往古相州

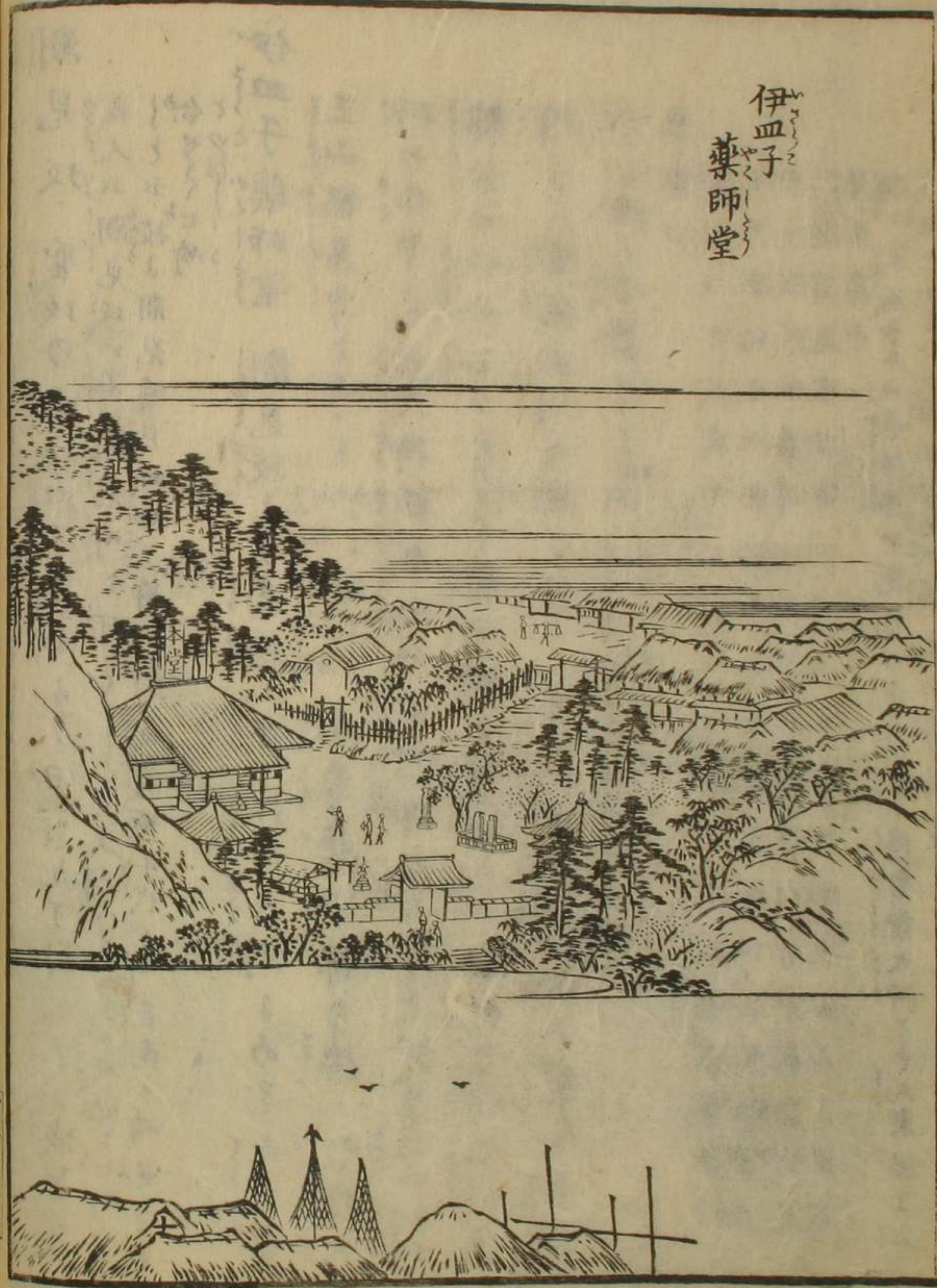
鎌倉の佐介谷より。薬師堂とのみ其の騒乱の時住僧護

持し。當國品川の地に移し。今津殿山。終寛永年間

東鑑曰。建保六年戊寅十二月二日庚子。京兆依靈夢所。今草創給之大倉新御堂安置薬師如来像。造慶奉。阿闍梨遍雅堂達頭覺房良喜。僧也。施主並室家。等坐。中。此薬師佛と運慶の作と。寺傳智證大師と。又東鑑より。京兆とあるハ北条右京大夫義時の子なり。

東鑑曰。建保六年戊寅十二月二日庚子。京兆依靈夢所。今草創給之大倉新御堂安置薬師如来像。造慶奉。阿闍梨遍雅堂達頭覺房良喜。僧也。施主並室家。等坐。中。此薬師佛と運慶の作と。寺傳智證大師と。又東鑑より。京兆とあるハ北条右京大夫義時の子なり。

伊豆子  
薬師堂



牛小屋

牛町牛の町あり

延宝江戸因に此地を牛の死と云とあり

牛を畜する家多く牛の數

一千足千足は餘り

養ふ処の牛牛の額額小く其角後角は靡き靡くを藪

覆覆と号け号上品上品なり都都々牛牛ハ行事行事正正しく殊殊は早早形形婉婉は

精氣精氣撓撓す力量力量勝勝たる不不軛軛をを多多重重をを兼兼せせく遠遠きに

運入運入人の用人の用を助助るる其功誠其功誠は必必くく古古ハ淀鳥羽淀鳥羽の

あありり都都の外外あり牛車牛車なり

所入所入國國の頃頃より許許宥宥

江府江府あり是是を用用ゆ

餘餘ハ駿河駿河はありの

唯唯此此三ヶ所三ヶ所は限限り

高輪高輪大木戸大木戸宝永七年庚寅新新海道の左右左右は石垣石垣を築築せ

高札場高札場とあり

江戶江戶の喉口喉口なり

肆海亭肆海亭あり

京登京登東下り伊勢伊勢叅宮叅宮等等は旅

人を人をを錢錢と迎迎ふ

常常はは繁繁

其初其初同所同所田町田町四丁目四丁目の三三辻辻は

此地此地は

七軒七軒と云云辺辺ハ酒旗酒旗肉

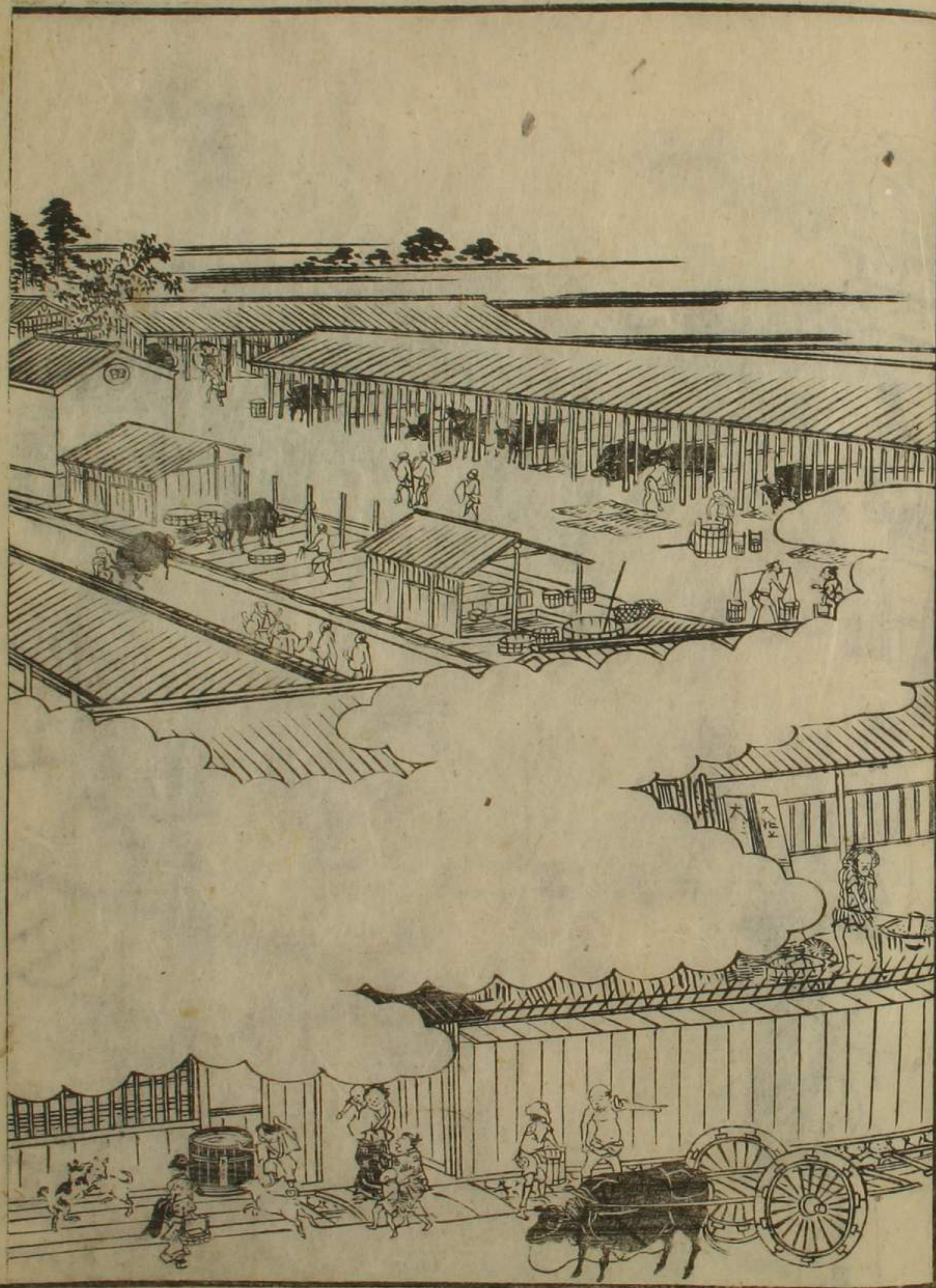
此此地地は

海海岸岸あり

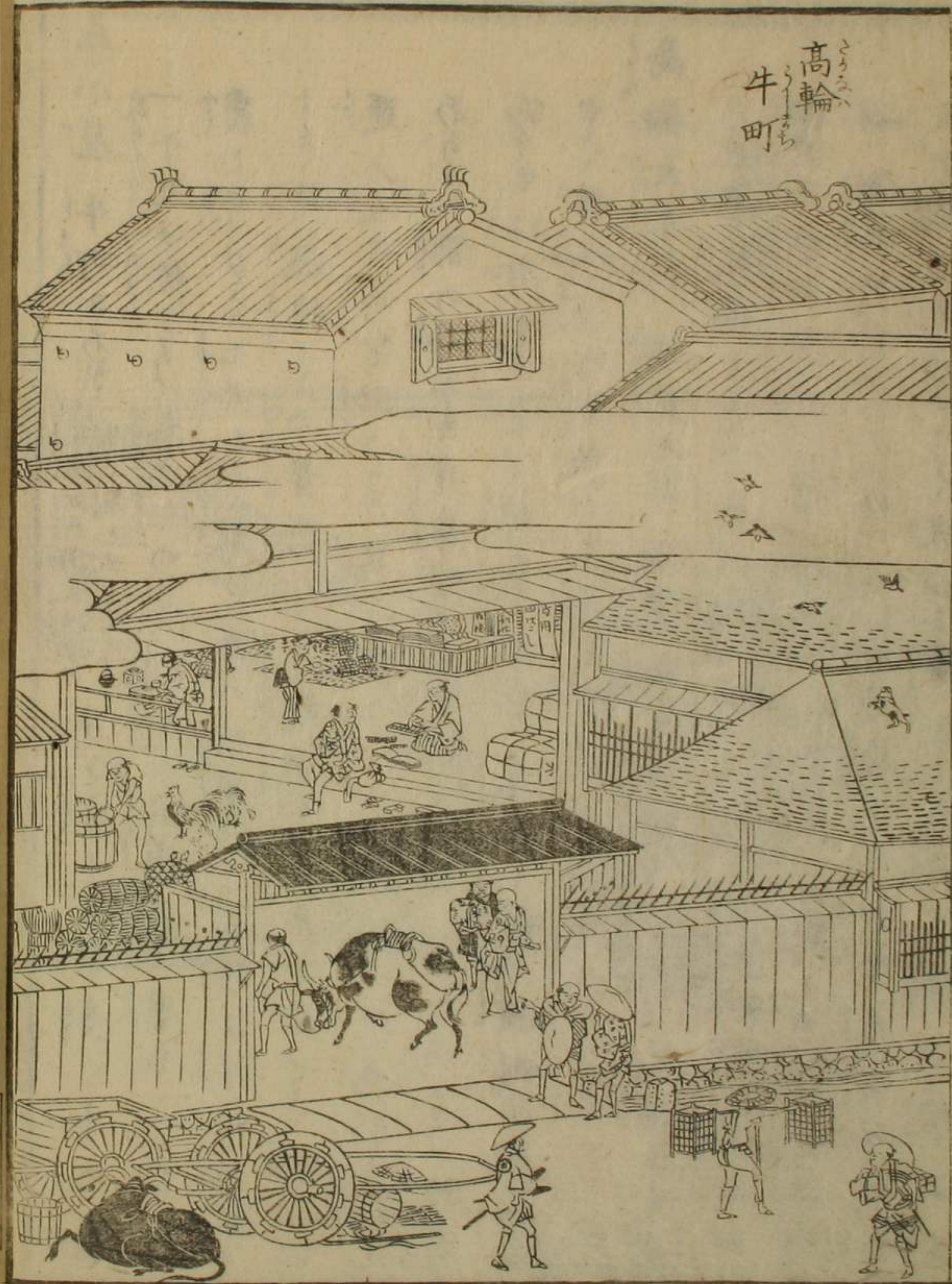
七軒七軒と云云辺辺ハ酒旗酒旗肉

人人をを錢錢と迎迎ふ

常常はは繁繁



高輪  
牛町



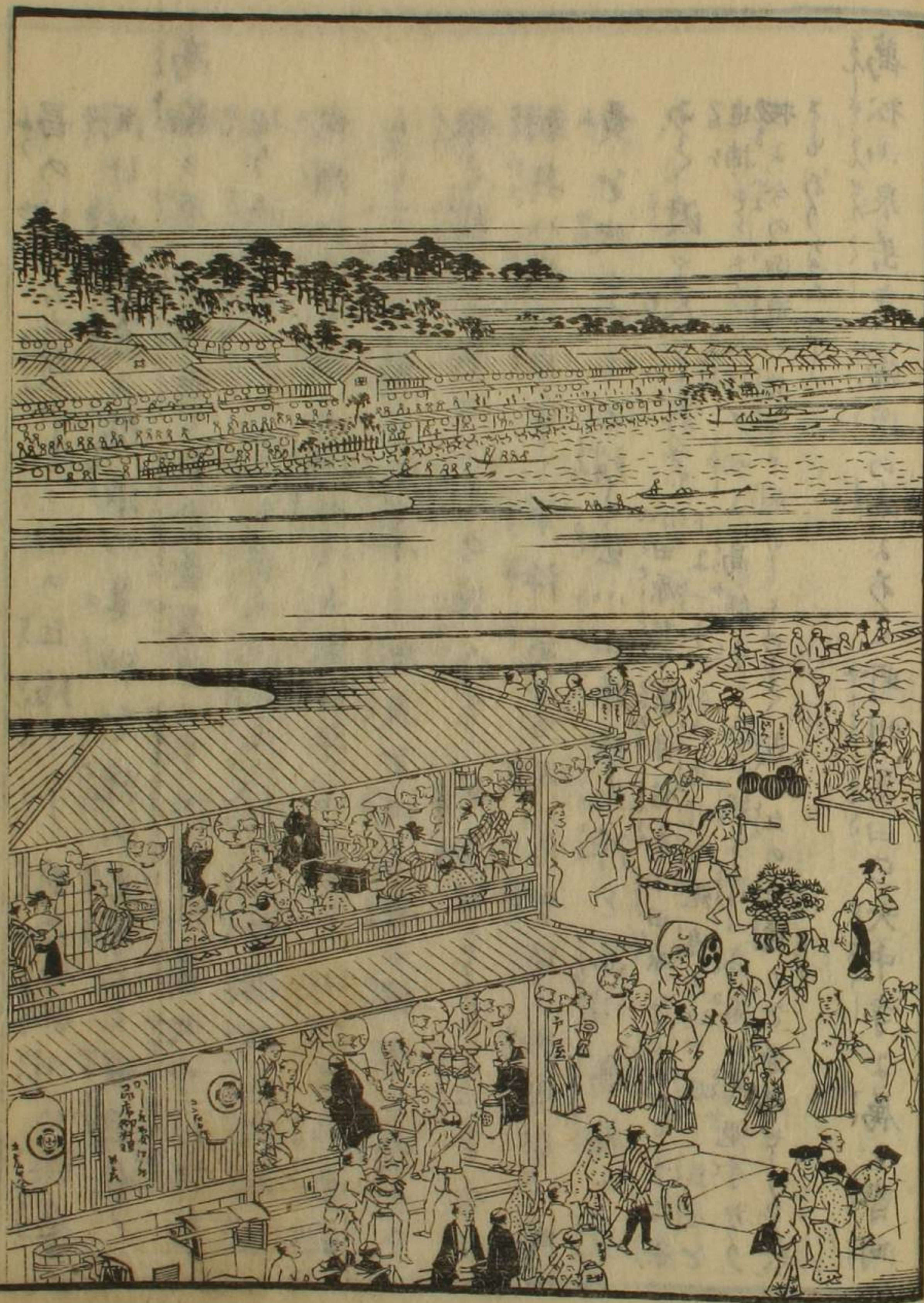
綠海旌郊關高肝  
 上路間早朝平吐  
 日殘霧半含山遠  
 近征帆出東西驛  
 馬班長安從此去  
 萬里幾人還  
 南郭



高輪  
 大木戸







高輪海邊  
七月  
二十六夜待



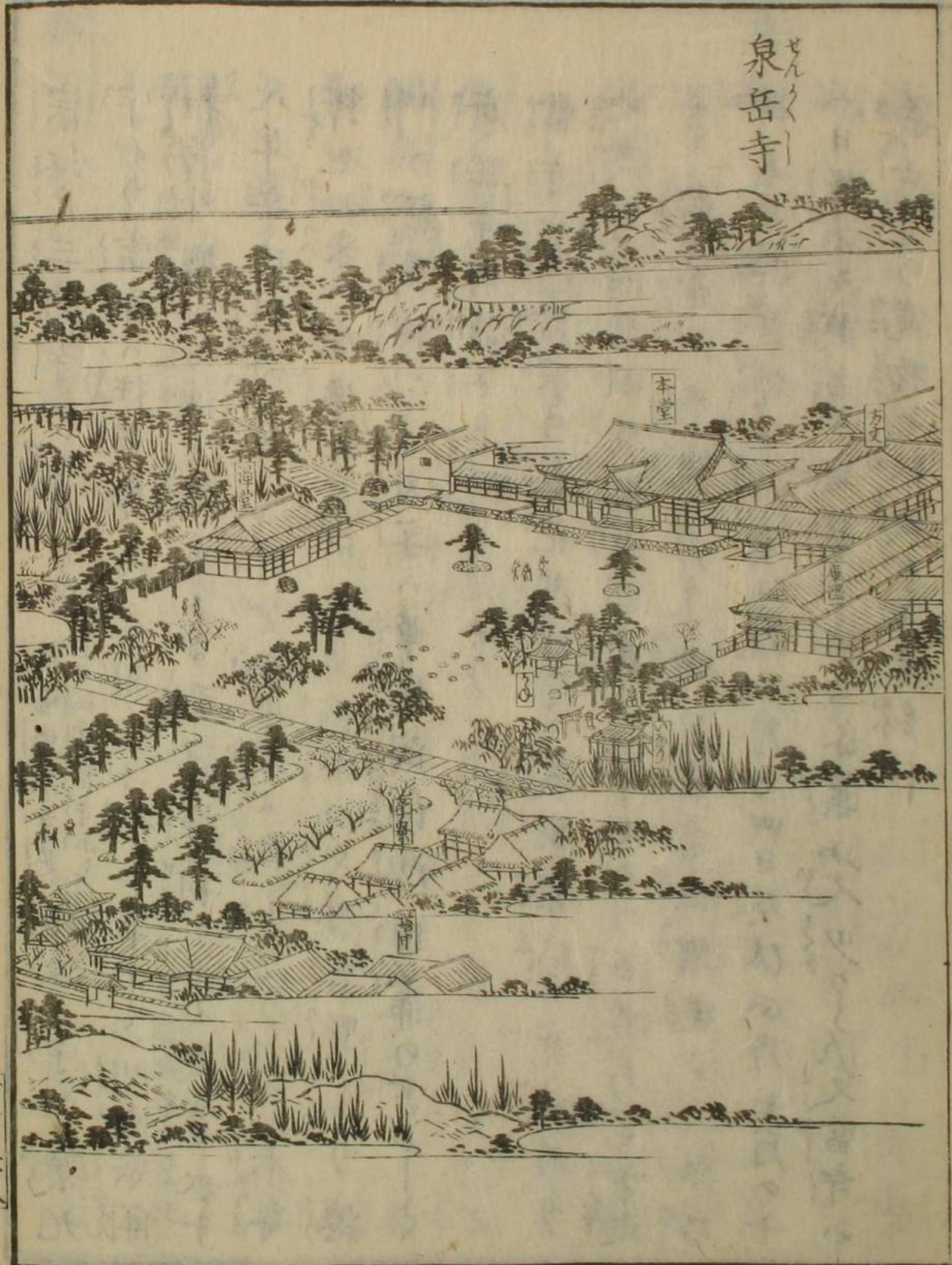
昌の地とて後中を三田の丘綿とて前中を品川の海邊と  
 開け諸を寄る浦浪の真砂を洗入光景を寂興あり  
 高輪原里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村杯  
 辺り迄の惣称りてを異本北條五代記上杉修理太夫朝興  
 武州江戸の城に居住を大永四年正月十日小田原北條家  
 よりも二万餘騎を引率し朝興と攻んぬる彼地を發向を  
 依る稻毛六郷の上杉の家人より早馬とて急を告る  
 朝興ハ俄の事あり軍評定中も及んぬ中途に出迎ひて勝  
 負を決まへしと決り出小田原の先陣と品川高輪原  
 あり渡り合とあり小田原記に永保信玄小田原を攻むとき信玄  
 追捕あり又江戸に高繩手とあり然る時高繩手なり  
 概今の海道ハ後世に開けしものあり古ハ丘の上通りと通路せしむるハ  
 萬松山泉岳寺海道の右あり野州富田の大中寺は屬を曹洞

宗江戶三箇寺の一員とて橋場總泉寺迄  
青松寺當寺ハ坊舎三字学寮九  
 宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉りて門庵宗開  
 和尚外櫻田の地を創建する所也禪刹なり後寛永十  
 八年辛巳再命ありて寺を今の地に移りたりとハ本尊  
 釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文珠普賢なり總  
 門の額萬松山の三文字ハ華僧岡沙門道霈の書なり  
 康熙辛酉孟冬上浣と記せり  
 當寺ハ淺野家の香花院なり其家累代の兆域あり  
 又淺野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔あり方丈  
 あり南の丘に半腹あり傍に當寺住僧建る所也石  
 碑あり其旨趣を注し二月三月の四日及び正月七月の十  
 六日等ハ英名と追慕し々々集人少くハ又當寺ハ  
 義士等の遺物を收藏する多し



浅野家の  
 義士を  
 かくす  
 の  
 池  
 あり  
 かしら  
 其角

二ノ百三十八

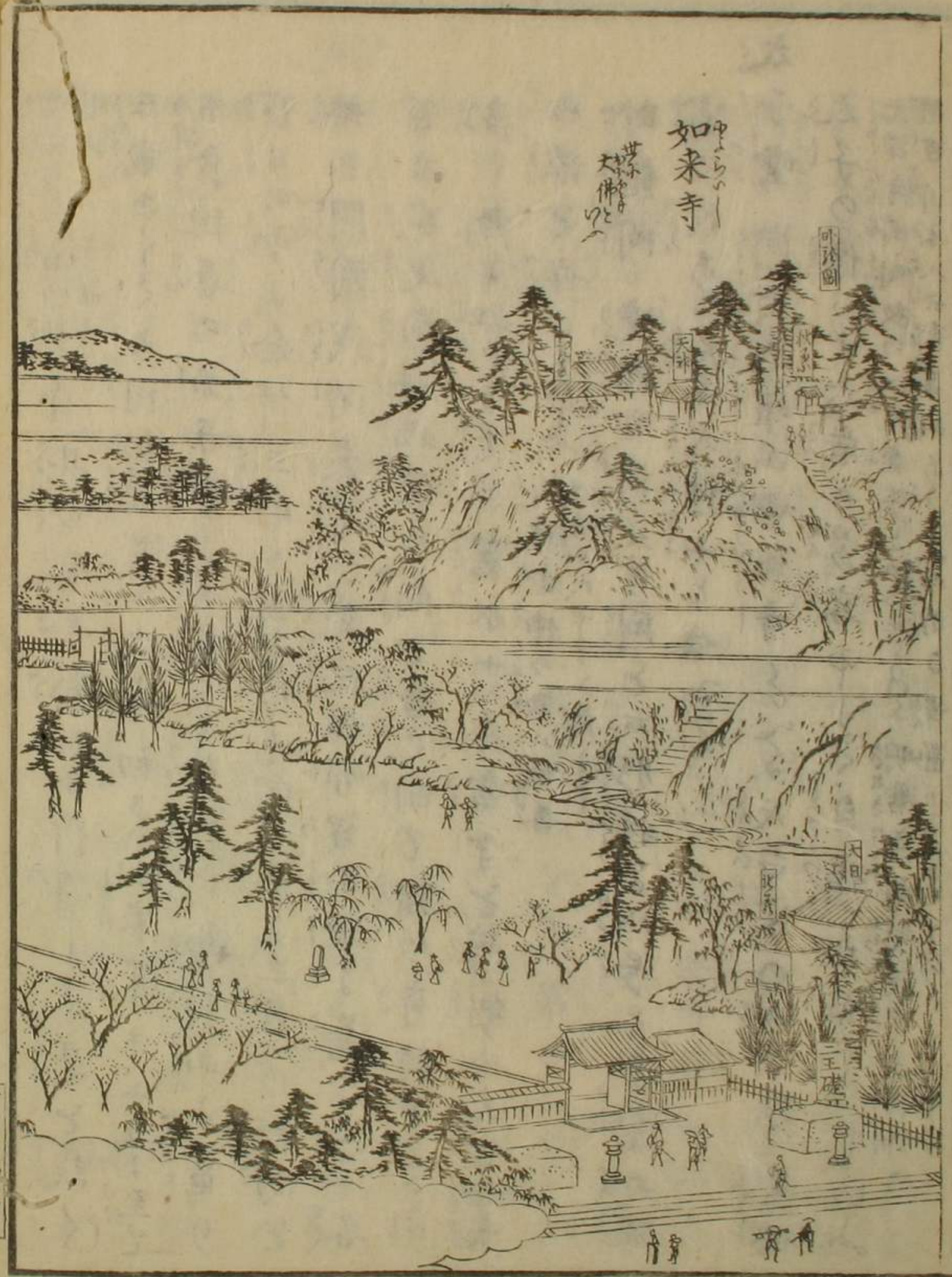


泉岳寺  
 せんごく

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英  
と刃傷し及ぶふよと長矩は死とあり後其家の長臣大石  
内蔵助良雄本國播州赤穂に在る君の讐は共小天と  
戴へり云の義ふよと血盟を以て同志の首をわて  
らひ終り元禄十五年十二月十四日讐家に至り義士四十  
七人義英の所在を捜し其首級を得當寺に至り七  
君の墓前には祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せ  
しるハ諸書不詳なるを以て之を省く

歸命山如来寺 大日院と號を泉岳寺の南に隣り天台宗  
の東叡山は属せり本尊五智如来八座像各一丈あり  
俗に芝の木食但唱師の彫造なり但唱ハ佛工やと云ふ  
大佛と稱し佛の作は妙を得たり故  
奇智如来十三佛等ハ但唱の作なり并に自の像をも作す  
五智如来十三佛等ハ但唱の作なり并に自の像をも作す  
揚州有馬郡高須村の産なり彼所は靈龜山興勝寺と云ふ  
利

如来及自の像をも 其母有馬藥師は祈請し是と説く  
彫刻安置せり 三歳や魚肉を食せし九歳初出家す年十五至  
木食但善の弟子と云ふと夫ら後信州檀特山は籠り  
百日の中念佛三昧と修得し向の峯は三尊の影向を  
拜し同國浅間嶽及び南紀の那智山等は籠るる各  
百日宛又南海北溟の間と普く回し諸の奇特と云ふ  
多し終り江戸下り寛永十二年當寺を開創し五智如来  
の像を作るとあり三時念佛の勸ハ但善  
卧龍岡 境内堂前北の岡と云形状を以て号と上り天満  
宮の祠あり天神山と云ふ  
太子堂 同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺はあり聖徳  
太子の像ハ十六歳の容やしく自作と云ふあり  
元禄年間開校の江戸鹿子と云ふ所の明暦年間越後守光長卿の  
臨臣ハ兵衛某故あり此所安置しとあり

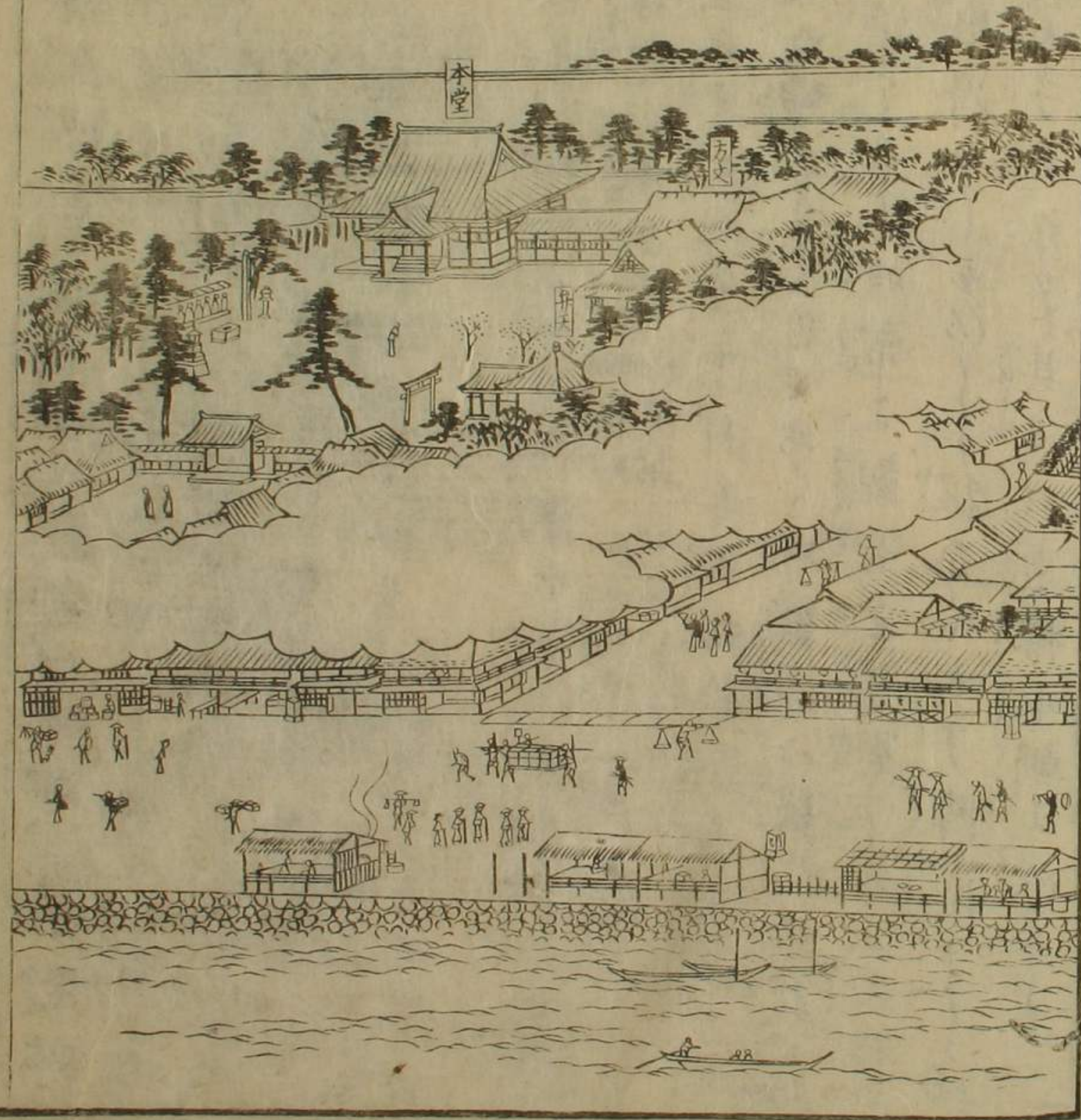


稻荷祠 太子堂 庚申堂の中は並ひ立せり高輪は  
産土神なり

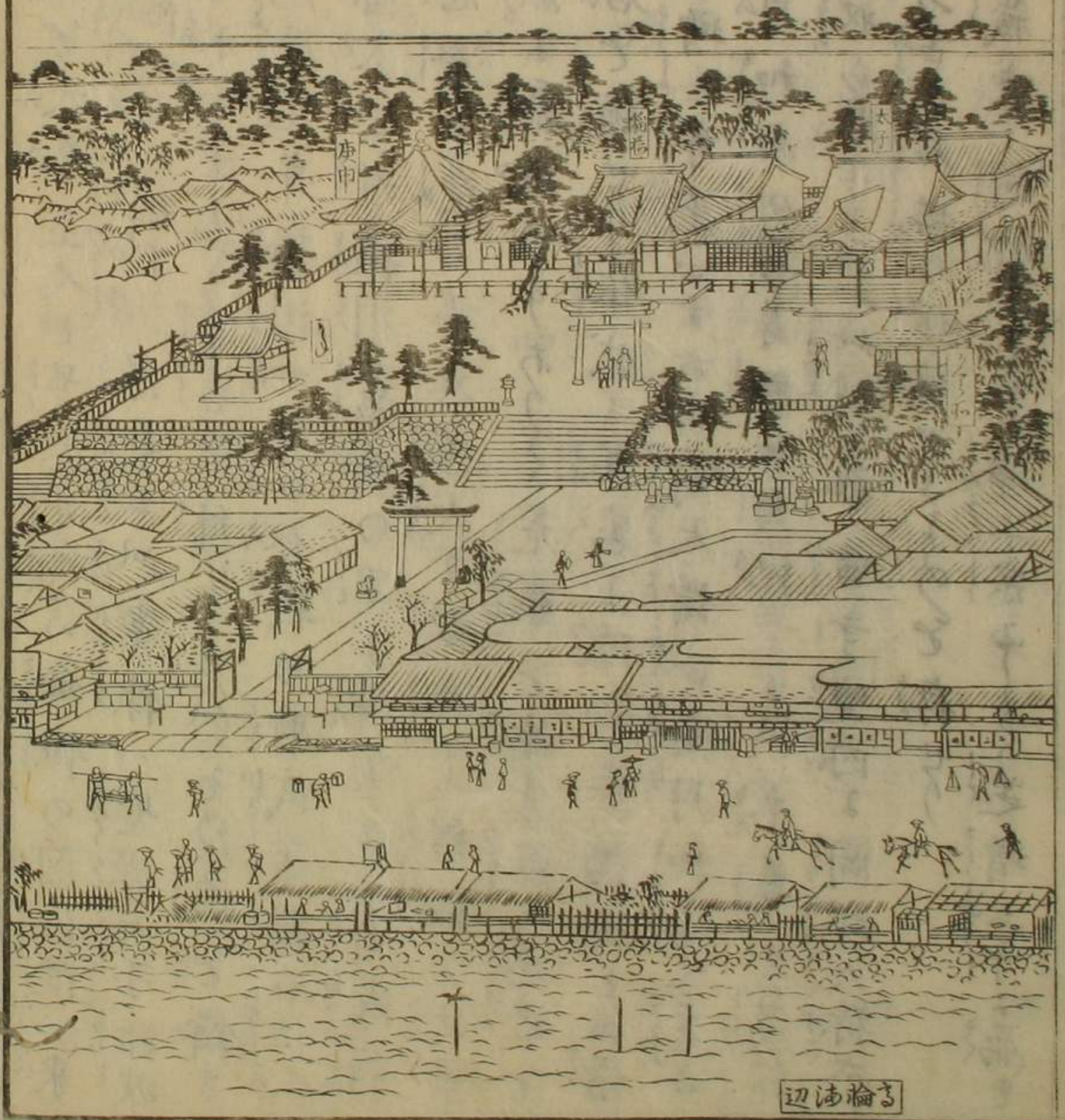
庚申堂 同一境内あり本寺青面金剛の本像なり攝州  
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作とり縁起云  
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間六度ありて八專  
の間日中より人間は三尸といふ三の悪蟲ありて災と  
招く然る庚申と祭る時ハ此蟲退散し身は幸を来りしめ  
若不信の輩ある時ハ命根と吸悪業を天帝に訴ふ今帝  
釋天王衆生とあわれみ故に汝は此法と附屬を我ハ  
則青面金剛なりと又十二の誓願を示しし僧都信  
心肝は命一直に感見しなる所の尊容を彫刻し普く  
衆生に庚申の法を授くとあり  
光熙山常光寺 同所北町あり浄土宗中へ芝増上寺は

属を潤山と大譽上人と号し本寺ハ金像の阿弥陀如来  
なり世に信州善光寺分縁起云此靈像ハ聖徳太子難波  
の堀江の水面中より尊容を拜しし其の像を鑄さ  
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人  
岡部六弥太忠澄攝州蘆屋の里に陣し時或翁  
此像を忠澄に受与す忠澄大に歡喜し鎧櫃に収め  
出陣せ然し靈威の有りて危難を除き刺へ忠度を  
討く武名を顯せり依代其家傳へしと獨夜と云僧  
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へなる  
遂に定月和尚件の旨趣と自記しし本尊と共に  
當寺に収られし此故也當寺境内に岡部六弥太  
墓と呼ぶ古き石塔の破壊せしものを存せり  
珠玉山宝蔵寺 同所あり浄土宗中へ芝増上寺に属す

常光寺



太子堂  
稲荷社  
庚申堂



辺津橋



石神社

縁遠き所  
良社を祈  
れ必我あり  
較賽の  
社地不何  
限らそ  
樹木を  
習俗と  
相傳へ  
石舎  
又と

開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覺大師開創の梵刹  
中々天台宗なりしと云ふ所の頃あり今ノ宗風ヲ轉  
しく七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を奉る阿彌陀  
如来の像ハ善導大師の作なりと云ふ所ハ宝珠と持し  
故に世俗宝珠阿彌陀如来と稱す  
本尊の背面ハ永隆元年  
十一月十七日彫刻と鐫

子安觀世音 當寺ハ安を画像中々々 延喜帝の震筆  
なりと云縁起一卷あり 和画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ  
縁起略云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其  
途中一人の婦ありと告て云く此靈像ハ梁武帝未皇  
太子マシ海を過る時常ニ觀音を祈念し或時此  
靈像と感得なりと云ひ程なく太子降誕し海  
をり昭明太子是なりと其後此靈像本朝ニ渡り





高山

稻荷社

薩州  
南の  
藩の  
南より

欽明天皇御崇敬あり又  
醍醐天皇の尊信なり  
震翰を注ぎ縁起を作らせしを  
頼朝卿を侍り鎌倉に安置し  
其頃和田左衛門尉義盛再縁起と書添  
此靈像鎌倉兵乱の後當寺に遷し  
御長七寸

辨財天 慈覺大師江州竹生島に詣りて  
波間は影現あり宇賀神社形と模擬し  
三分彫刻あり  
石神社 同所高輪南町鹿兒島久米西炭の間の小路  
西の方二丁にあり祭神詳ならず  
安泰寺の持主昔ハ遮軍神を作  
成就の後ハ必何より樹木を携へ來り社地を裁



東  
禪  
寺



賽まゐりもとりの此地このちと石神横町いしのかみよこまちと字あざとするハ此社このやしろありぬ

土人とら漢あやままゝとて横町よこまちと唱なづふ

佛あま日山東あさひとう禪寺ぜんじ 同所どうじよ高輪中町たかづちなかつまちありて妙心派めうしんはの禪宗ぜんじゆ江戸

四箇寺しつかんじの一ひとなり本尊ほんそんハ釋迦しやくぢあ如来にがはいら開山かいざんハ嶺南れいなん和尚おしょうと号なづけ

寶鑑ほうかん國師こくし和尚おしょうハ日向ひむか國くに鉄肥てつひの人ひと守永もりなが氏うぢ肥前ひぜん守祐もりすけ良よしの五

男おとこわらうと幼こどもなり佛門ぶつもんハ入いる後宗門ごそうもんの大徳だいとくなり

七しち日にち寂じやくを慶長けいぢやうの頃ころ江戸えどよ来きる阿左布あさふハ一字いちじを關せきく當寺たうじ

是こゝなり其地そのちと今いまも寛永かんえい年間ねんかん今の地ちハ移うつる徳門とくもんハ海うみ

臨のぞむ此門このもんの額ぬか海上かいじやう禪林ぜんりんの四大字しやうだいじハ朝鮮せんせん國くに雪峯せつぽう比筆ひひつ

寶鑑ほうかん録ろく云いふ救謚きうい大だい法ぽう鑑かん禪師ぜんじ嶺南れいなん和尚おしょう大だい心しん中ちゆう興かう主しゆ盟めい東とう禪ぜん

有あ喜き壽じゆハ幡宮はたみや寺じ外そと右みぎの方かたハあり安泰あんたい寺じ奉祀ほうじす

開闢かいびやく始はじめ祖そ得とく法ぽう洛らく西せい之地のち捺轉なつてん向かう上じやう機き關かん盛せい化け海かい東とう

此地このちと有あ喜き壽じゆの森もりと号なづく或人あるひと云いふ古ふるへ老樹らうじゆの枝えだ一ひと株かきありて

谷や山やま今いま云いふ所ところハ品川しんがわの入口いりぐちハありて海うみハ臨のぞむ丘かみとさし

あつよへり昔むかしハ大日山だいにちやまと号なづけり

諸侯しよこうハ人の弟宅あにちやくありて

智ち者しやとて仙臺せんたい侯こう別莊べつしやうの地ちの辺へハかけく都みやこハ谷山やま村むら

此こゝ地ちハ限かぎる号なづけり

後世ごせい其堂そのどう宇う破や壞くわいせし頃ころ谷山やま稻荷いなぎの地ちハ又また品川しんがわ北馬場きたうまばの光嚴こうげん

寺じへ收いむると今いまハ其その石いし像ざうの所ところ存ぞんをありす

江戸名所圖會天樞下終

